

---

## 昭和初期和洋折衷住宅の移築再生プロジェクト

近畿大学産業理工学部 工 藤 卓

## 1 昭和初期和洋折衷住宅の移築再生プロジェクト

### 1-1 はじめに

この報告は、平成14年6月から平成17年3月にかけて太宰府市宰府2丁目の齋藤邸を移築保存し、同時に再利用のための修理修景を計ることを目的に実施された「昭和初期和洋折衷住宅の移築再生プロジェクト」の記録である。

### 1-2 プロジェクトの経緯とその歴史的文化的価値

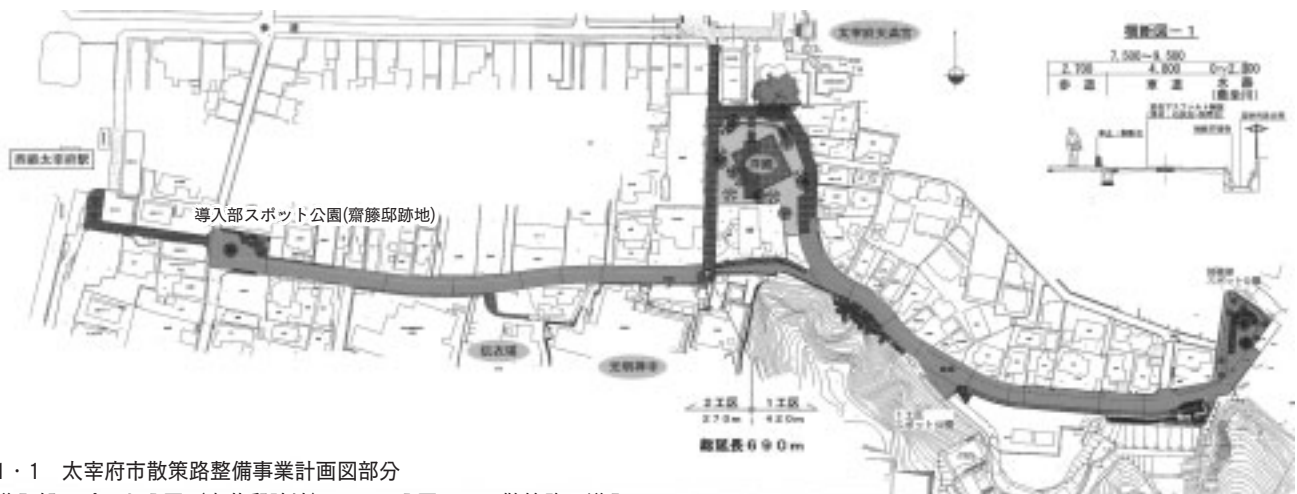
プロジェクトは、九州国立博物館（平成17年11月開館）の建設に先立って、西鉄太宰府駅からの「太宰府市散策路整備事業計画」に構想されたスポット公園用地確保のための要移転物件対象となったことがはじまりである。また丁度この時期に、齋藤家では太宰府市の整備計画の動きとは全く別に、当時空家となっていたこの住宅の改修計画の検討が行われていた。偶然にもこれら双方の計画時期が折よく重なりあったことが、このプロジェクトを景観まちづくりの一環として推進する力となった。さらに、この計画を住宅の保存再生計画として意味あるものに近づけた要因は、住宅の位置する前面路に沿ってわずか東20mに齋藤家が代代所有してきた菜園（移築当時は貸駐車場）が移築先の敷地として用意できたことによる。

齋藤邸は、太宰府天満宮に至る旧街道（錦町通り）と、歌枕にも詠まれる藍染川に沿った小路（浦町通り）が丁字に交わる角地にあった。昭和2年から4年にかけて建築された木造瓦葺き2階建て住宅で、玄関脇には洋窓を付けて西洋下見板を外壁に張った洋風の応接間を設け、主座敷と奥座敷には南面する庭があり、中廊下と台所・食事室を北側に間取りする、いわゆる

大正から昭和初期にかけての都市型文化住宅にみられる和洋折衷型住宅の特徴を見せている。景観的には、藍染川が流れる南に正面を向け、西の錦町通りに勝手口を設け、黒瓦の屋根と黒漆喰の外壁が複雑に重なる外観を表していた。さらに南と西の道路境には屋根付き板塀を廻し、庭園にマキなどの景観木を植栽するという角地の屋敷型住宅形式を意識した造りとなっていて、移築のために解体されるまでその建築当初の外観をほとんど変えることなく、地域に親しんだ景観を形成していた。

太宰府市の史料によれば、この住宅が建つ敷地一帯の地名は「溝尻」と呼ばれ、北側の三条地区から太宰府の町並みを流れてきた溝がこの付近で藍染川と合流して溝が終わることから付いた地名であり、江戸時代には、構口という宿場の境を示す施設があったという。また、市の文化財課によって行われた移築後の屋敷地発掘調査では、平安時代から江戸時代にかけての建物跡や井戸が見つかった。さらに、現在の道に沿うように、平安時代終わり頃の石積みを施した南北に続く溝も発掘され、この周辺の土地区画がその頃に行われたことが判ったという。

江戸期後半のこの屋敷地は現在よりもっと大きな区画となっていたようで、この住宅が建てられる以前には齋藤家の初祖である齋藤秋圃が住んだ屋敷が建っていた。秋圃は、秋月藩御用絵師として活躍し、この地に隠居してから太宰府のにぎわいを「博多太宰府屏風」に描いている。秋圃から現在まで継承されてきた齋藤家のこの地での住居景については、このプロジェクトに寄せた当時95歳になられた齋藤孝俊氏の手記に詳しい。太宰府に根ざして歴史を積み重ねた生活風景の史料として貴重であり、齋藤家の許可を得てその一部を次に引用する。



#### 1-1 太宰府市散策路整備事業計画図部分

導入部スポット公園（齋藤邸跡地）：この公園には、散策路の導入部として重要な機能を付加させる。みちの「入り隅」を整備し、待ち合わせ場所として居心地の良い空間を造ると共に、以前存在した齋藤邸を連想できる整備を行う。西鉄太宰府駅から、光明寺方向への見えがかりに留意し、光明寺さらには国立博物館の道程を予感させる場とする。太宰府市都市整備部建設課「散策路整備事業の概要」（平成16年12月）より抜粋。

## 太宰府の家の移築に当って

平成14年8月吉日

齋藤孝俊記す

### 太宰府の家

私は幼少の頃、太宰府に住んでいた祖母スミの住まいによくあずけられた。祖母は、躰が厳しく、茶碗の持ち方やご飯を食べる時のマナーまで、例えば、肘をはって食べると叱られた。私の父の弟や妹達は、お互いの挨拶が丁寧で、まるで他人同志が挨拶しているように見えた。朝の洗面後、神棚に灯明とご飯を上げ、仏壇の前に正座して、祖母が木魚を叩いて、お経を唱えるのを、手を合わせて聞いた。その後、次の間で各々が食膳の前に座って挨拶の後、箸をとった。

奥座敷は広くて、10畳近い床の間のある畳敷きで、書院の反対側には互い違いの棚とその次が仏壇になっていて、反対側には襖が並んだ内側は物置になっていた。座敷の庭側には、一間廊下の板張りがあって、雨戸を立てるようになっていた。広い庭には、向いに石段二、三段上って二階建ての白壁の蔵が上窓を開いたままで建っていて、中には小作米を入れる戸櫃があった。私は、時タイタズラがすぎると抱えられて、この米粒の山の中にほうり込まれた。白い蔵の右は、築山のように高くなっていて、柿木や、もみじ、つつじなどが植えられていて、裏木戸がつづいていた。

座敷前の広い庭は、右に水のない池状の凹地があって、長円形に囲むように、つつじが植わっていた。母屋から、この池に沿って「く」の字形の板張り廊下があり、庭側は吹きぬけ、反対側は壁になった長い廊下で、便所につながっていた。夜はこ

の廊下を通して、手燭にロウソクを灯して便所に行かねばならないので、怖かった。

蔵の下、左側には、屋根つきの深い井戸があって、滑車で綱の両側に水くみの桶がぶら下がっていて、水を汲んだ。この水は、生水では、決して飲むではならないと云われていた。昔の藍染め川の水系で隣近所の井戸水とつながっていて、伝染病が発生したことがあったと云う。井戸の周囲は洗い場になっていて、座敷側とは植木で境いされ、炊事場には戸を開いて入っていた。

座敷の次の間は、4畳半の畳敷きで、玄関の6畳敷きの間が続いていて、街道に向かってガラス戸のある明るい部屋であった。街道に面した所には、隙間のある格子が立っていて、次の間のおばあさん専用の長火鉢の位置からは、外の様子がよく見えた。中の間からは、炊事場の土間にも降りられたが、低い二階にも上がった。二階には、機織り機や糸車が置かれていた。玄関の間の右は、土間に降りて、板戸をくぐれば街道に出られた。

この家は、秋圃の次男である梅圃の長男・文山が、医者になり、太宰府で開業し、その妻スミ（私の祖母）と一緒に建てたものである。文山は、患者から結核を感染し、50歳の初頭で病没し、その長男の孝弘は医学校を卒業して、後に九州大学病院となった前身の福岡県立病院の内科医として勤務していた。文山とスミの間には、長男孝弘の次に妹チサとレキ及び末の男子として護邦（モリクニ）の4人の子供をもうけた。サチは裁判官と結婚し、後に長崎地方裁判所長を経て、福岡市で弁護士を開業していた。末弟の護邦は、京都帝大医学部卒業後、満鉄の吉林病



1・2 齋藤邸移築前の溝口から角地の齋藤邸を見る。(写真：城戸康利)



1・3 齋藤邸移築後の溝口から跡地スポット公園を見る。

院長となっていた。ただ一人、レキは結婚せずに、太宰府の祖母の許に同居していた。太宰府の家の小作人であった伝三郎の息子が、大工の棟梁になったが、これを機会に太宰府の旧宅に代わる立派な新築の家を建てさせて欲しいと私の父・孝弘に切願した。父は郷里に錦を飾りたいという願望があったので、この棟梁に万事を任せて贅を尽くした新築を建てることにした。祖母は反対したが、父が説得して、新築が完成した。祖母スミは、叔母レキと2人で、この家を守りつづけて90歳の生涯を終えた。

第二次世界大戦で、下関の医院も自宅も共に焼失したが、宰府の家は、残っていたので父母は戦時中ここに住み、終戦の年の3月に父・孝弘は72歳で死亡した。その4ヵ月後の7月下旬に6年振りに私が戦地から帰国して、母と妻と6歳になっていた息子仲道の3人と再会することが出来た。これも太宰府にこの家があったことで、感謝した次第である。思うにこの土地には92歳まで画筆をとった秋圃が、その子の梅圃と共に住んでいた家があって、孫の文山が医家としてこの地で開業した後、その家を建て替えたものであろう。秋圃、梅圃、文山、孝弘、孝俊とこの土地を継承してきた。将来も次々に受け継ぐようにして欲しいものである。このカド屋敷の土地は、市に道路拡張のために収用されたとしても、それに代わる昔の畑の自己の土地に、屋敷が移築されるのであれば、同じ土地として、継承しなければならない。

### 1-3 景観の保存修景

地域の歴史的な建造物や景観などの「保存」や「修復」の再

生デザインは、今後の都市景観の骨格形成に結び付く重要な課題である。再生デザインの目的は、歴史的文化的に価値ある景観を地域固有の「文化景観」として見極め、積極的に「継承・活用」を図って未来に引き継いで行くことである。「文化景観」は、単に建築の外観のみから映し出されるものではなく、歴史的に形成されてきた心地よい環境づくりや、人々の暮らし方を含めた地域社会が醸し出す生活の風景そのものである。

このプロジェクトは、「保存」と「修復」の実践として、太宰府天満宮周辺地域の日常風景の一部となってそこに存在し続けてきた和洋折衷住宅を、将来の登録文化財指定が可能となる「文化景観」の継承として住み続けていくための移築再生を取り扱っている。

近年の都市デザインや環境デザインは、ようやく「修復」のデザインのなかに未来の新しい生活文化を生み出していく理念を定着させるようになってきた。今後、地域の景観を形成する自然や文化遺産を修復することで、それらの持続的な活用を図り、地域の文化的期待に応える景観ストックの積み重ねを実践していく必要がある。

### 1-4 移築再生のデザインコンセプト

歴史的風致が激しく変化してやまない近年の太宰府の景観のなかで、この住宅が今日まで維持継承されてきたことは、太宰府の「文化景観」として十分に認識されてきた証であろう。長い歴史の中で、それぞれの時代の住宅が世代を超えて緩やかに変化していくことが、地域の中での望ましい景観の成長であるとなれば、この住宅の移築再生プロジェクトは、地域の景観と



1・4 角地に建つ移築前の齋藤邸



1・5 散策路整備前の藍染川に沿った浦町通りから移築前の齋藤邸を見る。



生活文化にとって意味がある。

したがって、本プロジェクトのデザインコンセプトは、第一に、解体移築前の建設時の住宅の構造と意匠・庭や塀、景観木を含めた景観そのものの継承を実現することである。第二には、変えるものと変えないものを見極め、日本の伝統的な住宅文化を継承発展させる独自の新しい現代の住宅文化を再構築することである。

#### 1-5 解体移築の経過

木造2階建て瓦葺き233.99㎡の本住宅の解体は、平成15年4月から6月にかけて、すべての部材の再使用を原則として十分な作業時間をかけて行われた。住宅設備の撤去工事が先ず行われ、次に、天井、床の間、飾り棚、建具・造作、床、屋根瓦の順に解き外された。その後、塗り壁と竹小舞を取り払い、最後は小屋梁・牛梁など和小屋組みの上部木構造から順次に柱梁材の軸組を解いていった。

これら一連の解体は、後に移築再生を施工する大工職の手で行われた。解体と再生は連続した建築行為であり、数えきれないほどの木造部材の組合せは、精度の高い部材管理番付と解体の実態現場を経ないと掌握できないと考えたからである。特に木材の仕口や継ぎ手の解きと、再度の建築組立には細心の注意と大工の技術を必要とする。天井板を押さえる竹釘の一本一本も再生時には貴重な部材となる。これら移築再生の大工技術は、伝統的な木造建築文化を継承する手段として守り育てられなければならない。

解体を終えた段階で、柱や天井材など化粧材のほとんどが、

台湾ヒノキ材であることが分かった。床柱や飾り棚には、シタンやカキ、クワなどの銘木が使われていた。柱間の基準寸法は1980mmの京間である。これら選び抜かれた木材の組合せや基準寸法の設定もまた伝統的な木造の文化として貴重である。

地域になじんだ景観要素として、門と板塀も移築再生が可能となるように解体された。マキやソテツなどの主要な景観樹木は仮移植し、基礎石や庭石も符牒を付けて仮移設した。

#### 1-6 角地の住宅を旗竿地に移築再生する

地域の人々から長く親しまれた角地の住宅景観を、規模も異なる旗竿地に移築再生することは、本プロジェクトでは最も難しい計画判断を要する関心事であった。前面道路と旗地の間には奥行きのある竿地が存在することから、本住宅の外観が奥深くに見えることになる。竿地のデザイン次第では、継承すべき景観の質が変わることになる。ただし、敷地の向きが角地と同じ方位の関係にあることは、伝統的な住宅の文化となっている南面重視の間取りと庭の位置取りを変えずに済むことになる。

移築再生主屋の敷地への配置は、竿地を通る玄関までの露地の軸上に玄関が正面となるように位置と向きの調整を行っている。そのため、1階東端に位置していた伝統的な住宅文化の一つである座敷奥の洗面所と廁の空間は切除せざるをえなかったが、その幅員を調整することで、敷地西端に勝手口に通じる裏路を確保できることになった。

#### 1-7 昭和初期の和洋折衷住宅の文化を再構築する

住宅が建てられた昭和初期の住宅文化を表している建築外観



1・6 西鉄太宰府駅から続く小路の正面に建つ移築前の齋藤邸



1・7\* 齋藤邸跡地に整備された小公園



1・8\* 小公園に整備された史跡説明サイン

と、南側に配置される表向き室の玄関、洋間、主座敷、奥座敷、さらに2階の表向き室は、腐食や細材のため再利用できない部材を代替の新材に取り換える以外は、当初材をもって修復することを原則とした。

玄関は、間口1間半で入母屋屋根を構え、縦格子戸と箒欄間を建てている。踏み込み土間には菱形の人研ぎ石板を敷き、台湾ヒノキ材の式台と3畳間の柱間には舞良戸と明かり障子が建つ。この玄関は本住宅の象徴的な空間であり、屋根瓦も含めて可能な限り当初材を用いた修復を行っている。

玄関脇の応接間として造られていた洋室は、オリジナルな室内意匠を尊重したまま書斎に転用している。プラスター塗の壁と天井は当初の形状に修復し、床はチーク材で張り替えた。他の内装は、大正・昭和初期の洋風文化住宅の空気を表せるように、カーテンはウィリアム・モリスのデザイン生地を、ペンダント照明はアール・デコスタイルのグローブを折んで室内表装を新調している。さらに、勝手口脇の付室を書斎用の書庫に改修し、その裏手ホール側には住宅用エレベータを新設した。

10畳敷きの主座敷は、床の間と付書院、飾り棚、長押の座敷飾りを付け、出隅柱1本に支持された広縁を廻している。それらの座敷意匠と南面の庭を見晴らせる開放的な空間構成は、典型的な和風本座敷となっている。竿縁天井が張られた天上高は3.15mと高い。再構成にあたっては、襖を除く全ての座敷構成部材に洗いをかけ、わずかにオイルをしみ込ませて経年の風合いを損なわないようにしている。聚楽塗りの壁色は元の重厚な黒色から薄ネズ色にあえて塗り替えている。保存再生のデザインではあっても、住宅の色彩などは現代の感覚に合せて改修し

てよいと考えたからである。襖はこれまで数度の張り替えがあったと思われ、復元は難しく、今回は日本の古典的な色彩染めの絹地を張った建具に新装している。

2階では、和室8畳間が2間続く座敷空間を、板の間の広間に改修することにした。畳を外して床全面にウオールナットの板を張り、床に座る座式生活と椅子座式の立ち居振る舞いが共用できる住まい方を提案している。無垢の厚板仕様のウオールナット材の木質感は、やや高目の天井高（2750mm）の伝統的な座敷の室内意匠によく映え、彫り欄間や聚落塗り壁とも調和を見せている。なお、北の間の柱間装置で紫檀の床柱が付く床の間・飾り棚と南の間の柱間装置の配置を逆転して取り付け、さらに北の間に取付けた一間幅の床の間地板を机甲板に転用している。伝統的な日本の木造住宅の改修でもっとも自在に創意工夫して造られてきたのがこの柱間装置であり、これらも現代の生活スタイルに合せて創意工夫されてよいと考えた。他にもウオークインクローゼットの増築や押し入れを改造したトイレの新設、エレベータの新設などの改修も行っている。ただし、南正面からの外観見えがかりには改修による変化が表われないように細心の注意を払っている。

#### 1-8 中廊下と北側日常空間を改修する

1階北側に間取りされていた、勝手口、台所、食事室、トイレ、浴室などの日常頻繁に使用する裏向き室は、柱梁の軸組の位置を変えずに構造補強したうえで、最新の設備機器を備える機能空間に改修することにした。住宅を長年にわたって使い続けていくためには、このような住宅設備が伴う空間は順次更新

していく必要があり、その空間のデザインも時々の生活スタイルを反映した改修を重ねていくことが肝要である。

リビング、ダイニング、台所を合わせた面積42.64㎡、天井高2.950mmの空間ボリュームは、伝統的な木造住宅の軸組構造が自由な改修に向いているからこそ実現できた空間である。北側開口部には天井一杯までの縦繫明かり障子而建て、外部テラスと無段差で繋いでいる。床は、明るい色調の無垢のチェリー材を張り、壁と天井は珪藻土を塗って仕上げ、視覚と触覚に柔らかさを与えている。これら一室化されたりリビング・ダイニングと、勝手口、トイレ、風呂が並ぶユーティリティ空間とは、大型の間仕切り収納家具を用いた空間の分離を図っている。収納家具の扉は、日本の伝統的な朱色に似るボンベイエローで塗装し、新設した天窓の光で鮮やかに見せている。天井に配列したウォールウォッシャー型ダウンライトの光もまた、この扉の赤を引き立てている。また、背後の廊下には、大正や昭和初期の文化住宅の空気を感じ取るインテリア要素として、緑と風をモチーフにした天井一杯までのステンドグラスをデザイン制作してはめ込んでいる。

#### 1-9 快適な住宅設備をデザインする

この住宅の寸法的な特徴は、京間寸法を基準として、1階床高と2階までの階高が一般住宅と比較して高いことである。そのため階段が急勾配となっていることから、今後の日常生活の上り下りの利便と安全を考慮して、小型ホームエレベータを新設した。

リビング・ダイニングと奥座敷8畳には、最新の省エネタイ

プの輻射冷暖房設備を設置した。この設備の放射面からの熱容量は緩やかなため放熱面積を大きく必要とするが、逆に、機器全体が縦格子状にパネル化されているため、視線を遮らない間仕切り装置として使える。EVホールとリビング・ダイニングの境には、幅3m、天井一杯までの白い格子パネルを熱放射と間仕切として設置した。このような解放的で天井の高い居室の冷暖房には快適な設備機器であり、改修などの再生デザインによる新しいライフスタイルの住まいには有効である。

#### 1-10 伝統的な木造軸組住宅の構造補強

伝統的な軸組真壁構造の木造は、柱梁と泥壁下地の貫板や小舞によって応力の均衡がとれている。しかし、今回の移築再生では、その応力均衡のバランス設計ではなく、通常行われている許容応力度を確保する構造設計を行っている。そのため、貫板や小舞に替えてステンレスブレースと構造用合板を用いた耐力壁を要所に配することとなった。しかしそれでも座敷広縁の軒の出が大きく、隅柱1本にガラス引戸が建つ極めて開放的な構造であるために、肝心の耐力壁を容易に設置できないことが問題であった。ここでは柱径を太め、床面に火打を用いて水平剛性を高めるなど、建築全体の応力のバランスを良くすることでこの問題を解決している。

基礎については、地盤調査から判断して一般的な布基礎で十分な耐力を期待できたが、床下を防湿仕様に改造するなどの工事を行うために鉄筋コンクリート造のベタ基礎と布基礎を併用した複合基礎としている。

#### 1-11 庭のデザイン

伝統的な住宅の庭は、敷地の向きや間取りと密接な関係にあり、住宅文化を語る重要な修景要素である。南の座敷庭は、灯籠や手水石などの石組やマキの景観木などを移植した観照庭として再構築している。ただし、奥座敷の東端に在った洗面とトイレの空間を敷地幅の不足から切除せざるを得なかったために、縁庭の手水鉢は、玄関脇の庭景として再利用することにした。

この住宅は、床下が高く、庭造りでも要所でバリアフリーの解決が必要であった。勝手口には風雨を避けるポーチを新しく設け、そのアプローチには車いすを使用できるようにデッキスロープの庭を挿入している。さらにそのポーチ越しには、浴室からも観照できるモミジを植栽した坪庭を配置している。

主屋の北側には、リビング・ダイニングの外庭として木製床のテラスを広げ、下草のクマササの中にハナミズキとコブシを植栽した。その背後にはアルミ角波板の境界塀を設けて、プライバシーの保護と日光の反射光を得ている。このテラスは、日常生活で活用する屋根のない自然空間としての奥庭である。

#### 1-12 竿地のデザイン

旗竿地の竿地にあたる敷地には、新築するガレージと倉庫、門庭と玄関路地を修景デザインしている。ガレージと倉庫の形態と配置は、旗地に移築する主屋を前面道路の散策路からどのように透かして見せることができるか、また門から玄関までの余白を主屋に相応しく整えられるかがデザインの課題であった。ここでは、主屋の全体が垣間見えるように建物の高さを低く抑え、屋根と外壁を黒色塗装でまとめ、さらに外壁と天井の間に

透明ガラスの欄間を付けて洋間の窓が見通せるように工夫している。夜間にはこの欄間からのあかりが行灯効果となる。

新設の倉庫は、家財や日常品の収納蔵である。伝統的な日本住宅の「しつらい」のシステムを支えてきたのは蔵の存在とその文化である。本プロジェクトの移築再生の機会に、蔵の持つ意味と利用法を再び提案することは、伝統的な住宅を再活用するための有効なデザインと考えた。

門庭では、地域周辺の歴史的景観に繋がりを持たせようとして、門と板塀、景観木、灯籠を文化的な景観要素に見立てた修景を行っている。板塀から見越す庭園木には、角地の屋敷から移したマキの大木を植えるとともに、太宰府のシンボルツリーとなっているウメの古木を景観木として新規に植えている。

結果的にこの竿地のデザインは、角地の景観を旗竿地に押し込まざるを得ない敷地条件を逆手にとって、ガレージと倉庫を新築したことで、門と主屋との間に適度な奥深い空間が生まれ、新しい屋敷地のかたちを整えることになった。

#### 1-13 まとめ

昭和初期の都市型住宅は、明治末・大正期の中廊下型住宅を受け継ぐとともに、洋風の応接間を玄関脇に付け加えた和洋折衷型住宅をつくり出していた。しかし現在ではこの時期に建てられた本格的な和洋折衷型住宅は数少なく遺されている状況になっている。幸いにもこのプロジェクト住宅は、今回の移築再生工事によって、この時期の住宅様式とその生活文化を壊すことなく、むしろ将来の登録文化財住宅として評価される整備をととのえることができた。



このプロジェクトの目的のひとつが、昭和初期和洋折衷住宅とその背景がつくり出す景観を、地域の文化として継承・育成するデザインを行うことであった。およそ3年に渡るプロジェクトであったが、太宰府市や地域住民のご好意と関係者の熱意で、この所期の目的を達成できた。

もうひとつのプロジェクトの目的は、伝統的な生活文化を継承しながら、現在の住み手の生活スタイルに合せた新しい住空間に再生するというものであった。施主であり住まい主となられる齋藤様には、秋園の代から受け継がれてきた生活文化の再発見に努めてゆとりある新しい生活を工夫していくというご理解をいただいている。新築住宅の場合と異なり、伝統的な木造住宅の再生には、時を経て生き続けてきた空間を活かして未来の新しい住まい方を創造していく楽しみがある。

本プロジェクトでは、伝統的な木造住宅の修復を基本として、地域景観への配慮、多様な庭の配置、蔵システムの再生、木構造補強、床段差の解消や浴室のバリアフリー、通風の確保と輻射冷暖房設備の併用、エレベータの新設、暗さを解消する天窓採光、適切な照明環境、全ての設備の省エネ電化など、現代住宅としての十分な機能性と快適性を備えている。

おわりに、本報告の図面作成は佐野正樹氏、\*付写真の提供は藤本健八氏によるものである。謝してお礼申し上げます。

#### 建築の概要：

1. 用途：専用住宅
2. 用途地域：第1種住居地域

#### 3. 建築概要：

- 1) 構造・構法／木造軸組民家型工法
  - 2) 基礎／鉄筋コンクリート布基礎＋ベタ基礎
  - 3) 規模／地上2階、1階階高3,650mm、2階階高3,275mm、最高高さ9,330mm、
  - 4) 面積／敷地597.33㎡、建築236.03㎡  
(建ぺい率：39.51%＜60%)
  - 5) 各階床面積／1階177.90㎡、2階70.56㎡、倉庫・駐車場58.14㎡
  - 6) 延べ床面積／306.60㎡ (容積率：51.33%＜200%)
  - 7) 主要外部仕上げ／屋根：日本瓦引掛葺瓦葺、外壁：漆喰塗り、下見板張 (洋室部)
  - 8) 主要内部仕上げ／床：畳敷、板敷 壁：聚楽塗り  
天井：台湾ヒノキ竿縁天井、プラスター (洋室部)
  - 9) 主要冷暖房／輻射式冷暖房＋パッケージ型エアコン
  - 10) 主要家具／間仕切り・台所：オリジナル設計制作  
ダイニングテーブル：Arflex リビング家具：Cassina
- #### 4. 施主／齋藤 仲道
5. 所在地／福岡県太宰府市
  6. 設計・監理／近畿大学 工藤 卓
  7. 設計協力／AL architects 佐野 正樹
  8. 構造設計／坂田一級建築士事務所 坂田 寛
  9. ステンドグラスデザイン 工藤 啓子
  10. 家具デザイン制作／森岡 陽介
  11. 工事施工／大庭建設株式会社 大庭 敬詞
  12. 工事期間／平成15年4月～平成17年5月

## 2 齋藤家画稿について

橋富博喜（近畿大学産業理工学部）

太宰府齋藤家の画稿類の存在をはじめて知ったのは、2003年春のことであった。齋藤家の移転設計を担当されていた近畿大学産業理工学部の工藤卓先生よりその存在を知らされ、同年4月、建築を請け負う建設会社の倉庫に保管されている画稿類をはじめて見る事ができた（図2・1）。おおよそ1メートル四方の箱の3分の2ほどに、ほとんど未整理のまま画稿類がのこされていた。おそらくここ数十年は手つかずの状態であったことも想像できた。そこでとにかくこの資料を預かって、時間のあるときにすこしずつでも調べていこうと考え、わたくしの研究室に運び込んだ。しかしながら糊がはかれ、それぞれが断片となった作品整理の作業はなかなかはかどらず、2004年度に研究室に配属になった学生の卒業研究としてとりあげ、彼女たちの力を借りてようやく調書を取り、写真撮影を行うことができ、2005年の春に写真付きの目録（DVD-R）としてまとめることができた（注1）。その数、断片を含んで1735件をかぞえる。以下これらの資料をもとに齋藤家およびその画稿について、簡単に紹介してみたい（なお作品名のあとの番号は調査番号である）。

### 画稿

いうまでもなく齋藤家は、秋月黒田藩のお抱え絵師齋藤秋圃を初祖とし、その三男梅圃が跡を継ぎ江戸時代後期から明治初年まで、絵師としての画系をつないだ家系である。

齋藤家にいまのこる画稿類は、前述したように1735件をかぞ

えた。多くは書画、およびその断片であるが、なかには、日記の写し、住所録、備忘録、書簡（およびその写し）なども含まれている。書画には、本画（完成画）の下絵というべきもの、運筆や彩色の稽古のためにえがいたもの、さらには今でいう写生（スケッチ）などもある。またこうした画稿には、区分をあらわすイロハの記号や番号、もとの作品の作者やいま写している筆者の名前、備忘のための色注や場所名など、多くの墨書が記され多くの印章が捺されていた。そのなかで齋藤秋圃と梅圃の区別をすることはむずかしい。すなわち「秋圃（?圃）」の墨書や印章のある作品をすべて齋藤秋圃作とするにはためらうところが多いのである。たとえば《双鶴図》（00439、図2・2）や《シュロ図》（00801）にみるように、「?圃」「梅」の文字が練習するようにたくさん記されている作品もあるし、《松に孔雀図（断片）》（01250）では「梅」を削字して「秋」の文字を書き加えている（図2・3）。また印章も手元があればいつでも捺すことは可能であるから、「?圃」の朱文方印が秋圃筆の決め手にはならない。そこでこうしたことを念頭にかけて画稿類をみてみれば、おおよそ秋圃の作品であろうかと考え得るのは3点のみになる。すなわち秋圃の作品とほぼ断定できるものは《筍図（断片）》（00855、墨書に「秋圃蔵」、表紙に「鍾馗大帳」（鍾馗台帳か）とある《鍾馗図冊》（01642、墨書に「癸所蔵」、「秋圃」の印章2顆、図2・4）、《植物図冊》（01649、スケッチの合間に「秋圃」の墨書）の3点にとどまるのではないかと考えている（注2）。ただ画稿と本画の関係でいえば、現在齋藤秋圃作とされ、いずれも福岡市博物館が所蔵する《遊行図》、《馬上人物図》や個人像の《菊慈童図》の下絵

画稿と思われる作品がのこされている。これらの下絵画稿を秋圃の筆とするのか、あるいは本画を秋圃以外の手になるものとするのか、もうすこし慎重に検討する必要があると考える。

齋藤秋圃の三男齋藤梅圃は、明治8年（1875）に行年60歳で亡くなっている。とすれば生年は文化13年（1816）ころになる。画稿中梅圃の墨書や印章のある作品は89件を数える。その最も早いものは《陶淵明帰去来図》（00599、図2・5）で文政11年（1828）の墨書がある。梅圃12歳か13歳ころの作品である。梅圃の署名があり年紀も記される作品は、その後文政末年から天保初年にかけて見ることができ、天保末年から弘化・安政年間にかけてはほとんど見ることができず、ようやく安政5年（1858）の《三福神図》（01636）になってふたたび登場する。ただいずれにしても文政年間から幕末までの、おおよその軌跡を追うことができる。そしてとくに集中するのが文政14年（天保2年、文政は12年まで、1831年）である。《布袋図》（00005）など17点を数える。この時期、齋藤秋圃は家督を長男?太郎に譲り（文政11年・1828）、その長男?太郎が江戸にのぼり（天保6年・1835）、そ?太郎出奔により秋月での家名断絶（天保9年・1838）など、齋藤家にとって大きな転換の時期でもあった。この間文政9年（1826年、文政11年以降とする説もあり）太宰府に移り住んでいた、太宰府の地で梅圃に手ほどきしたとも考えられる。

#### 文書記録

いうまでもなく齋藤家画稿類はすべてが初出である。そのなかには、絵画資料とともに文書の記録もいくつか含まれている。



2・1 保管されていた画稿類

これらは、齋藤家の画家たちがどのように過ごしていたかを直接に語るものであり、大変貴重な史料といえる。なかでも現在焼失したと伝えられ、その内容の把握ができない『京遊日記』（天保5年・1834）の写しと考えられる史料《京遊日記》（01715、図2・6）は重要である。その書き出しには「天保五年四月一日早朝天満宮……」とあり、この日妻と梅圃を伴って出立したことが記されている。ひと月あまりの記事しか記されていないが、秋圃、梅圃の旅程中のひとこまを記すものとして大変興味深い。

また文学関係（俳句関係か）の資料を含むと考えられる《覚え書（住所）》（00043）ものこされている。さらに秋圃の交遊関係と思われるものや大阪の歌舞伎役者の名前を記す《覚え》（01720）、長崎関係の住所氏名などを記す《諸國姓名録》（01732、図2・7）、《長崎人名録》（01733、図2・8）もあり、住所録として用いていたことがわかる。さらになお、長崎、筑後、柳川、佐賀の各地の地名がのこる《写生帳》（01734）もある。不明な点は多々のこるが、これらの史料から大阪、長崎、筑後、柳川、佐賀などに知人がいたことがわかる。齋藤秋圃は京都に生まれ、中国・九州を放浪したのち、長崎、大阪、福岡（秋月、太宰府）にその生活のあとを残しており、これらの地名が本画稿中の文書記録のなかにみえることは不思議ではない。今後こうした文字の記録類を解読することによって、秋圃や梅圃の活動期間の空白期やその交遊関係を明らかにすることが可能になると考える。

齋藤家にのこされた画稿類は、おそらく齋藤秋圃や梅圃の活

動から推測すればその一部分だと思われる。そしてその多くが齋藤梅圃の画稿類だと考えられる。ときに秋圃晩年の作品の真贋が問題になるが、そのひとつの解答はこの画稿類のなかにあるかと考えている。文書記録の解読とともに今後も慎重に研究を進めていきたい。

注1. 参加した学生は、大田海、尾田絵梨香、高木美和の3名である。

注2. もちろん墨書がない作品のいくつかは秋圃の筆に帰せることも考えられる。



2・2：《双鶴図》（00439）



2・3：《松に孔雀図（断片）》  
（01250）



2・4：表紙に「鍾馗大帳」（鍾馗台帳か）とある《鍾馗図冊》（01642、墨書に「癸所蔵」、「秋圃」の印章2顆）





2・5：《陶淵明帰去来図》（00599）



2・6：《京遊日記》（01715）



2・7：《諸國姓名録》（01732）



2・8：《長崎人名録》（01733）

### 3 移築前調査

#### 図版解説

- 3・1 東北から見上げる。手前は近年になって増築された台所・風呂・洗面所棟。屋根は居室ごとに小屋が組み瓦が載る。
- 3・2 東南から塀越しに見る。小路（浦町通り）に並んで庭木が景観木となっている。
- 3・3 西北の錦町通りから見る。手前角は風呂・便所など。
- 3・4 南面する門と板塀。移築においてはこれら素材を再利用すると共に、配置や形状、基礎石と道路との位置関係などを再現している。
- 3・5 南面する浦町通り側から見た建物正面。門と塀越しに伝統的な和風住宅に設けられた洋風の応接間が玄関左脇に見える。ここから眺める建物外観は建築当初とほとんど変わっていない。板塀に囲まれた2階家の縁側に並ぶ大きなガラス戸の連続が昭和初期の住宅の開放感を表している。
- 3・6 西の錦町通りから見る。裏玄関を中央部にとり、南端に洋風窓をつけた応接間を、北端に風呂、便所を配置している。屋根をずらし重ねること、建物全体の量感を押さえながらリズムを持たせている。黒瓦、黒漆喰、黒板外壁、黒板塀に経年の風食痕が刻まれた威風を感じる。
- 3・7 主座敷縁側から庭越しに奥座敷の縁側と洗面・廁を見る。この鉤型や雁行型の空間配列は伝統的な屋敷型住居の特徴のひとつである。
- 3・8 座敷の縁側から庭に降りる踏み石。移築直前頃は庭の使用が少なく、他石も混じって本来の石組みとはなっていない。
- 3・9 南主庭跡。庭石や礎石が散在していて本来の庭景ではない。マキやツバキが見える。
- 3・10 玄関犬走り。見切り縁石と基礎石の内小幅をモルタル洗い出し仕様で仕上げている。洗い出しは再利用が難しく、移築時には新規に復元施行している。
- 3・11 浦町通り側の板塀と景観木。昭和初期の建築以来の風景を維持している。
- 3・12 景観木イヌマキ。庭木の代表的な存在となっている。永年にわたって浦町通りの風景の一部となってきた。
- 3・13 景観木モチノキ。常緑高木で、庭木としてよく見かける。本樹は太木過ぎて移植を断念している。
- 3・14 景観木クロガネモチ。庭木や街路樹によく使われる。本樹は移築先の敷地関係から移植を断念している。
- 3・15 ソテツ。玄関脇洋間（応接間）の窓先に、庭木としては珍しく観賞用のソテツが植えられている。移植時にはこれらの位置関係を再現している。
- 3・16 石造り手水鉢。奥座敷の端に厠用として設けられたものであるが、むしろ庭景要素の役割が大きい。移築先では敷地幅の関係から厠を再現できなかったため、玄関先の庭景として再利用している。
- 3・17 奥座敷の縁側ガラス建具戸袋と厠の地下窓を見る。厠前面の庭景の常套として梅雨時が花期にあたり赤い実をつけるナンテンを植えている。
- 3・18 石灯籠（大）。庭景の重要な要素であるが、移築先の座敷庭面積の関係から、門庭に据えている。
- 3・19 石灯籠（小）。日本庭園の重要な要素であり、座敷と庭の見えがかりの関係を踏襲するかたちで据えている。
- 3・20 1階10畳主座敷。床の間、付け書院、飾り棚の柱間装置をつけ、東と南に縁側を廻す。天井高が3.15mと高く、全体にのびのびとした日本座敷である。柱、長押、天井材は全て台湾ヒノキ材を使用し、昭和初期の木造住宅の香りが濃い。聚落壁は黒色仕様であり、ここにも建築当時の色彩感を感じさせる。



3・1



3・2



3・3



3・4



3・5\*



3・6\*



- 3・21 10畳主座敷に廻された縁側。座敷と庭を繋ぐ緩衝空間となっている。隅の障子を開け放つと庭の石灯笼に目が行く。
- 3・22 台所と食事室の間仕切両面棚。テレビが組み込まれている。
- 3・23 8畳奥座敷の床の間に付けられた花頭窓の奥に廁・洗面所を見る。
- 3・24 洋間プラスター塗り天井を見上げる。天井の四周隅は線形で装飾され、中心には照明具を飾る円形のモールディングが付いている。
- 3・25 2階座敷から南縁側を見る。欄間、大型のガラス戸、手すりの意匠に昭和初期の住宅意識を感じ取ることができる。
- 3・26 2階座敷続き間。右手南側の前座敷に続く左手北の奥座敷を見る。奥座敷の窓からは宝満山や四王寺山などが眺められた。空間の序列からは、2階の奥にあるこの座敷が日本の伝統的な住居のもっとも奥性を感じさせる様式を備えていることになる。
- 3・27 玄関。やや骨太の引き違い格子戸が建ち箴欄間が付く。天井は台湾ヒノキ材を用いた格天井を構成している。
- 3・28 玄関式台。人造研ぎ出しテラゾー四半敷の土間に続いて間口1.5間幅の台湾ヒノキの式台を構えている。式台は近世から続く日本の住居形式の要素のひとつとしてその存在は貴重である。
- 3・29 勝手口玄関。表通りの錦町通りに面している。意匠は正面玄関の重厚な造りと比べてやや細かな作りである。
- 3・30 玄関脇に付けられた洋間の扉。
- 3・31 一階奥座敷の端に設けられた廁と洗面所。屋敷型住居の形式のひとつとして貴重であるが、移築先の敷地幅が不足したため廁・洗面部分は移築再生ができなかった。そのため、台湾ヒノキ材でつくられたドアや天井の用材は他所に設けた洗面・トイレで再利用している。
- 3・32 中廊下。向かって右の南側に座敷が、左の北に台所や食事室が配されている。明治末年から大正、昭和初期までの都市型住宅に見られた住居形式のひとつで、住宅史から見れば貴重である。しかし、現代の住まいへ再生を計る場合は、このままの中廊下型形式では住み難く、移築にあたっては新しい平面計画の工夫が必要である。
- 3・33 作り付け台所小屋。
- 3・34 洋間に置かれた皮張り椅子とモールディング脚の小テーブル。
- 3・35 移築前2階平面図 1:150
- 3・36 移築前1階平面図 1:150
- 3・37 移築前1階床伏図 1:150
- 3・38 移築前基礎伏図 1:150
- 3・39 移築前南立面図 1:150
- 3・40 移築前北立面図 1:150
- 3・41 移築前東立面図 1:150
- 3・42 移築前西立面図 1:150
- 3・43 移築前仕上げ表
- 3・44 移築前2階床伏図 1:150
- 3・45 移築前小屋伏図 1:150
- 3・46 移築前2階天井伏図 1:150
- 3・47 移築前1階天井伏図 1:150
- 3・48 移築前展開図1 1:100
- 3・49 移築前展開図2 1:100
- 3・50 移築前展開図3 1:100
- 3・51 移築前展開図4 1:100
- 3・52 移築前展開図5 1:100
- 3・53 移築前展開図6 1:100



3・7



3・8



3・9



3・10





3・11



3・12



3・13



3・14



3・15



3・16



3・17



3・18



3・19



3・20\*



3・21



3・22



3・23



3・24



3・25



3・26





3・27



3・28



3・29



3・30



3・31



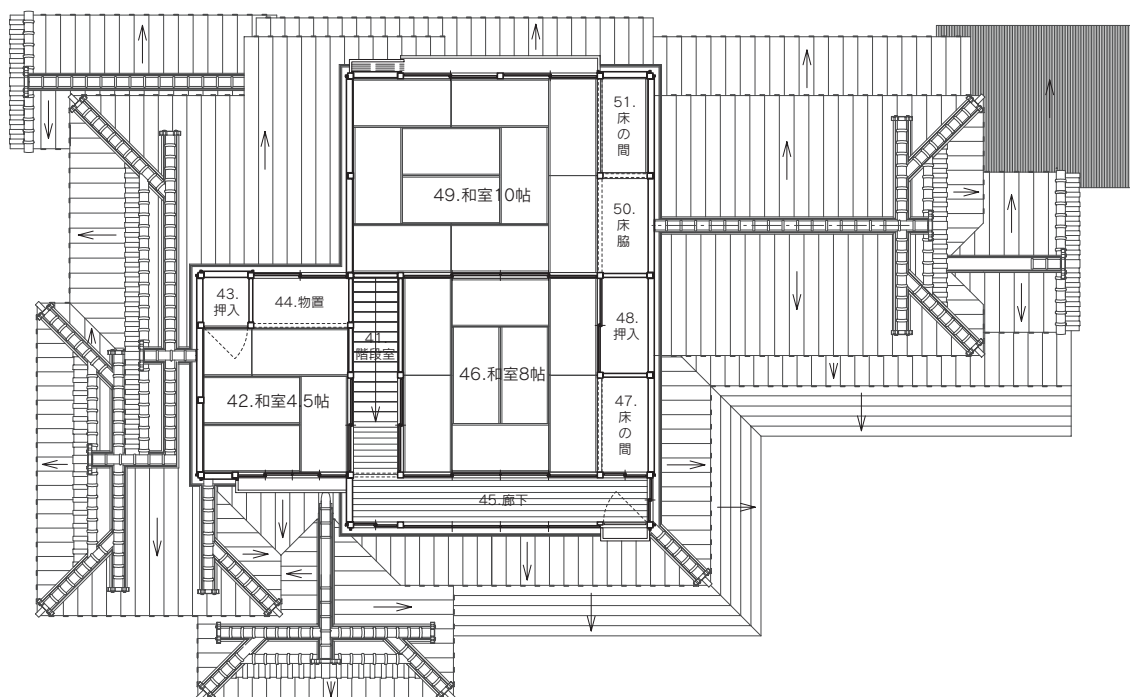
3・32



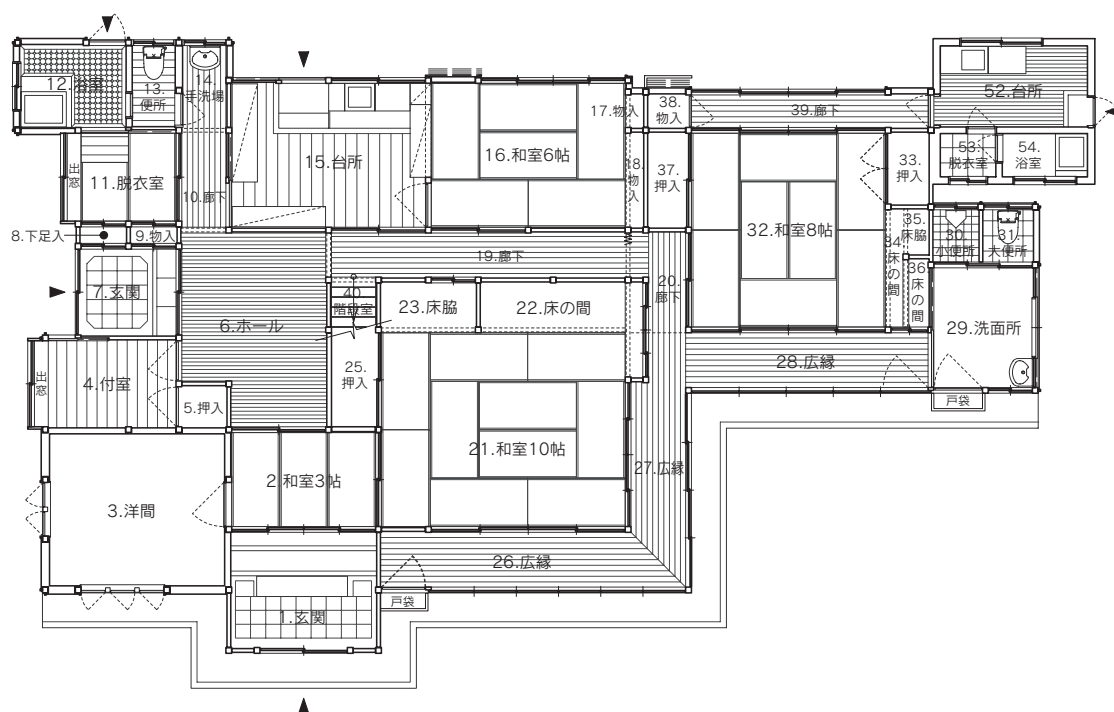
3・33



3・34

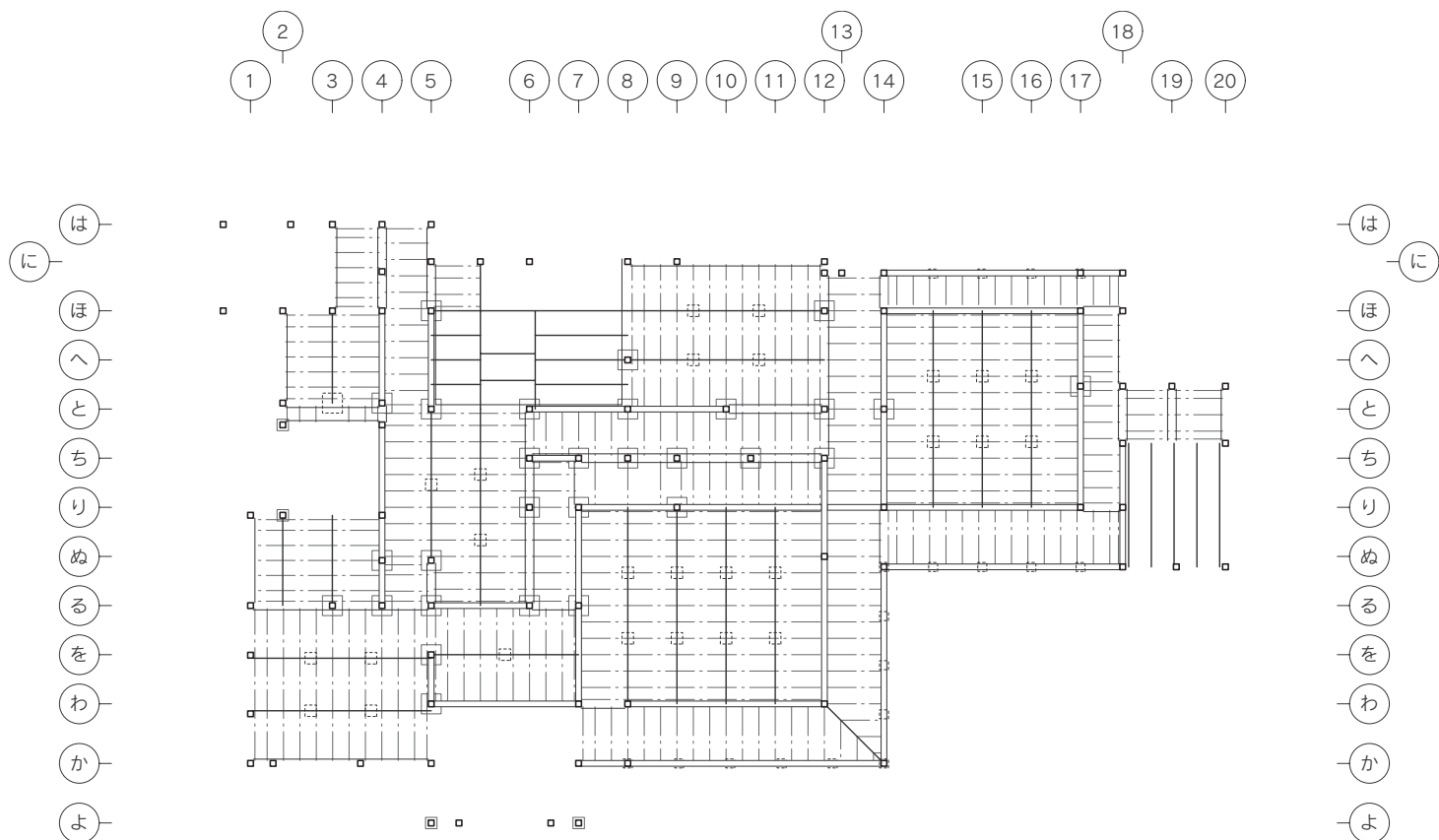


3・35 移築前2階平面図 1：150

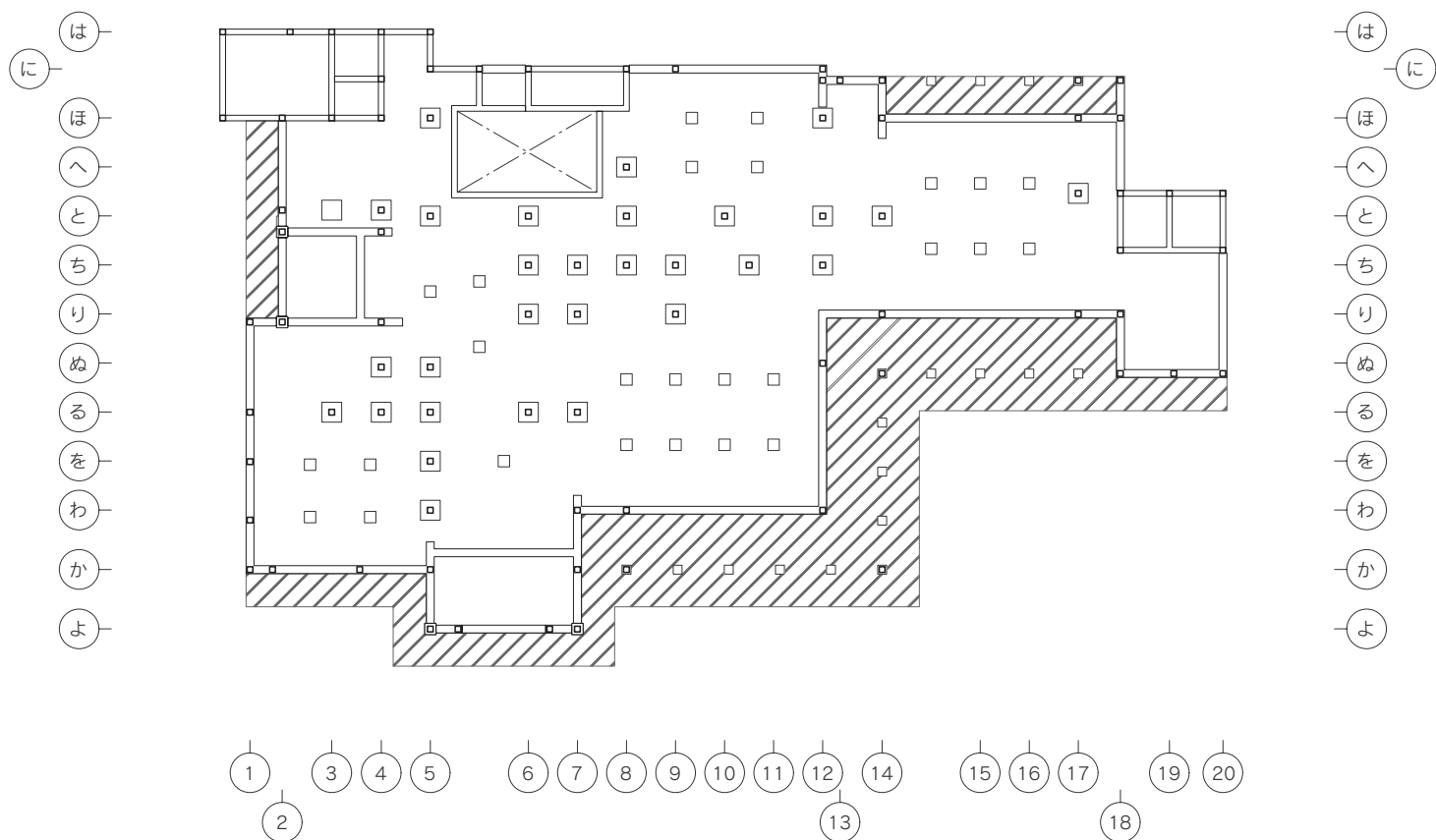


3・36 移築前1階平面図 1：150

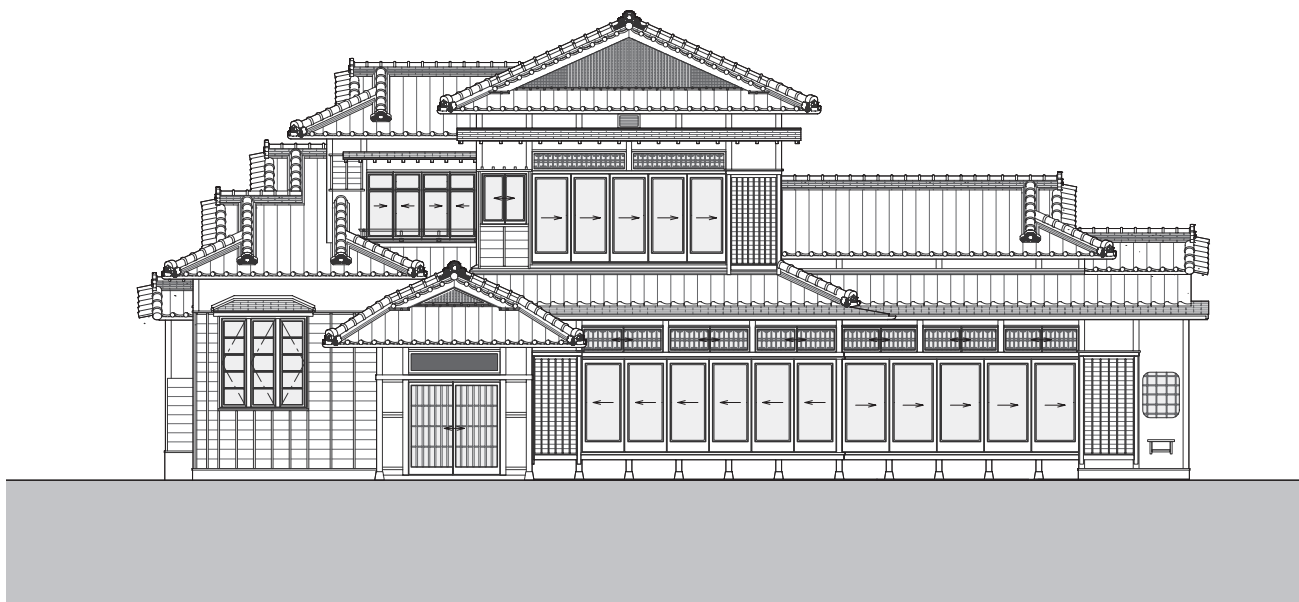




3・37 移築前1階床伏図 1:150



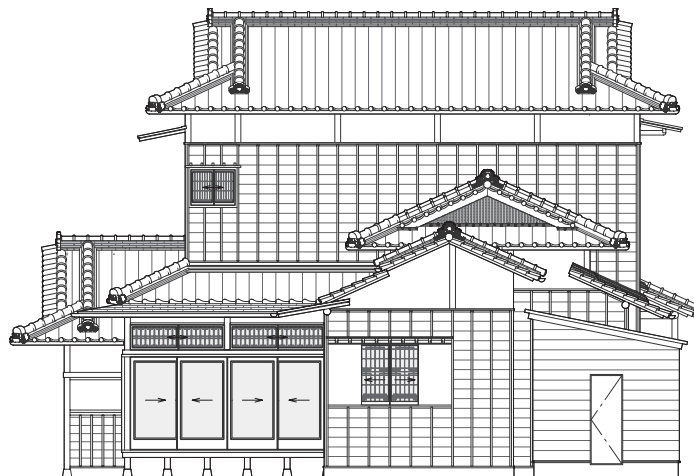
3・38 移築前基礎伏図 1:150



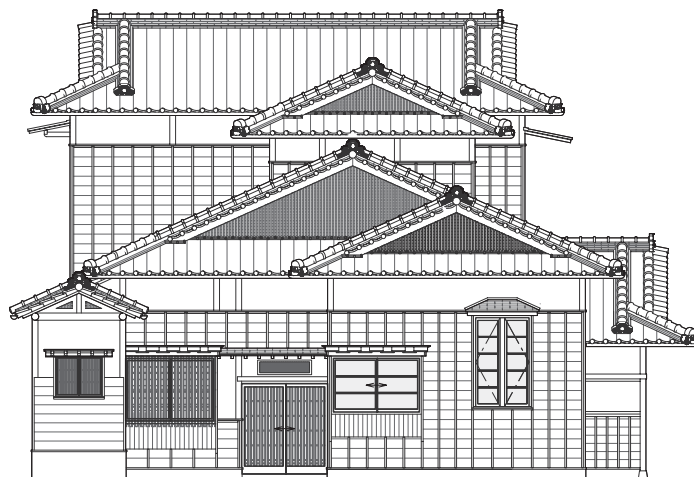
3・39 移築前南立面図 1：150



3・40 移築前北立面図 1：150



3・41 移築前東立面図 1：150



3・42 移築前西立面図 1：150

## 3・43 移築前仕上げ表（太宰府市調査資料）

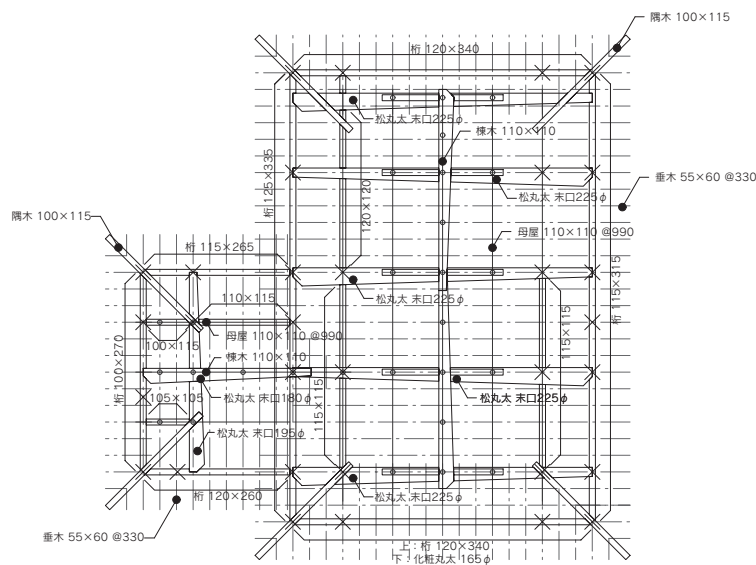
階別	番号	部屋名称	床	壁	天井	天井高
1F	0	外部	人造石貼(研出し) 厚さ6.0cm			
1F	1	玄関	人造石貼(研出し) 厚さ6.0cm	(真)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地) (真)羽目板張(荒壁下地) (真)じゅらく壁	格天井	2.85
1F	2	和室3帖	たたみ(上)	(真)じゅらく壁 (大)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地)	竿縁天井(杉桤張)	2.75
1F	3	洋間	カーペット張(上)	(大)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地) (大)クロス張(並)(荒壁下地) (大)クロス張(中)(荒壁下地) (大)プラスター塗(上)	塗天井(プラスター塗)	3.15
1F	4	付室	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.65
1F	5	押入	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.65
1F	6	ホール	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.75
1F	7	玄関	人造石貼(研出し) 厚さ6.0cm	(真)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地) (真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	3.05
1F	8	下足入	板張	(真)しっくい塗(荒壁下地)	杉板天井	1.65
1F	9	物入	板張	(真)しっくい塗(上)	杉板天井	2.40
1F	10	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)せんい壁(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	11	脱衣室	たたみ(上) 縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.55
1F	12	浴室	モルタル塗金鍍仕上 厚さ6.0cm 磁器質タイル貼 他 厚さ6.0cm	モルタル塗金鍍仕上 厚さ10.0cm 内装タイル(150×150) 厚さ10.0cm (真)リシン吹き付(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	13	便所	フローリング	(大)特殊化粧合板(プリント系)(荒壁下地)	クロス張り天井(並)	2.30
1F	14	手洗場	縁甲板張(桧上小節)	(大)内装タイル(150×150) (ラス下地) (大)特殊化粧合板(プリント系)(荒壁下地) (真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.45
1F	15	台所	縁甲板張(桧上小節) モルタル塗金鍍仕上 ラス下地	(真)荒壁 (真)しっくい塗(上) (大)特殊化粧合板(プリント系)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	16	和室6帖	たたみ(上)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.75
1F	17	物入	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	杉板天井	2.50
1F	18	物入	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	杉板天井	2.60
1F	19	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)せんい壁(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	20	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	21	和室10帖	たたみ(上)	(真)じゅらく壁 (真)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地)	竿縁天井(杉桤張)	3.15
1F	22	床の間		(真)じゅらく壁		2.95
1F	23	床脇		(真)じゅらく壁		2.00
1F	24	物入	板張	(真)しっくい塗(上)	杉板天井	0.40
1F	25	押入	合板張(上)	(大)特殊化粧合板(プリント系) (大)特殊化粧合板(プリント系)(荒壁下地)	プリント合板天井	2.6
1F	26	広縁	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	根太天井	3.15 2.75
1F	27	広縁	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	根太天井	3.10 2.75
1F	28	広縁	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	根太天井	3.10 2.75



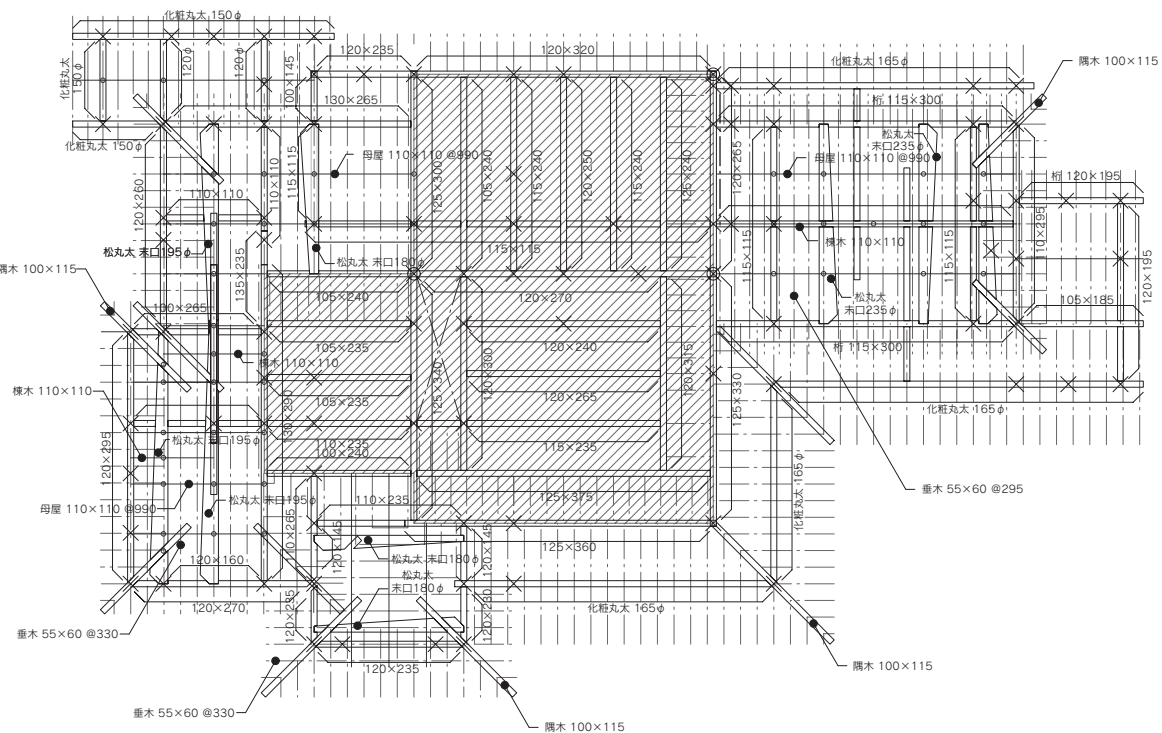
階別	番号	部屋名称	床	壁	天井	天井高
1F	29	洗面所	ビニール床シート張(上)	(大)内装タイル(150×150) (ラス下地) (真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.70
1F	30	小便所	磁器質タイル(150×150)ラス下地	(大)内装タイル(150×150) (ラス下地) (真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.800
1F	31	大便所	プリント合板張	(真)しっくい塗(上) (大)特殊化粧合板(プリント系)(荒壁下地)	竿縁天井(杉桤張)	2.80
1F	32	和室8帖	たたみ(上)	(真)じゅらく壁	竿縁天井(杉桤張)	3.10
1F	33	押入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.25
1F	34	床の間		(真)じゅらく壁		2.75
1F	35	床脇		(真)じゅらく壁		1.95
1F	36	床の間		(真)じゅらく壁		2.45
1F	37	押入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.05
1F	38	物入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.50
1F	39	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上) (真)しっくい塗(上)	根太天井	2.90 2.80
1F	40	階段室		(真)しっくい塗(上) (真)特殊化粧合板(天然木系)(荒壁下地)		3.65
2F	41	階段室	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.60
2F	42	和室4.5帖	たたみ(上)	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉桤張)	2.55
2F	43	押入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.55
2F	44	物置	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(印刷もの)	2.40
2F	45	廊下	縁甲板張(桧上小節)	(真)しっくい塗(上)	根太天井	2.80 2.60
2F	46	和室8帖	たたみ(上)	(真)じゅらく壁	竿縁天井(杉桤張)	2.85
2F	47	床の間		(真)じゅらく壁		
2F	48	押入	板張	(真)しっくい塗(上)	竿縁天井(杉板)	2.55
2F	49	和室10帖	たたみ(上)	(真)じゅらく壁	竿縁天井(杉桤張)	2.90
2F	50	床脇		(真)じゅらく壁 (真)しっくい塗(上)		1.85
2F	51	床の間		(真)じゅらく壁		2.60
		外壁		(大)押縁下見板張		
				(真)モルタル塗(はけ引仕上)		
				(真)しっくい塗(上)		
				モルタル塗(はけ引仕上) 厚さ10.0cm		
				(真)羽目板張(荒壁下地)		
				(真)押縁下見板張(荒壁下地)		
				(真)合板張(荒壁下地)		

1F	52	台所	フローリング	(大)モルタル塗 (金鍍仕上)	クロス張天井(並)	2.20
			モルタル塗金鍍仕上 厚さ6.0cm	(大)特殊化粧合板 (プリント系)		
	53	脱衣室	複合床板張(フロアボード)	(大)特殊化粧合板 (プリント系)	クロス張天井(並)	2.25
	54	浴室	モザイクタイル貼 他 厚さ6.0cm	(大)モルタル塗 (金鍍仕上)	クロス張天井(並)	2.35
			モルタル塗金鍍仕上 厚さ6.0cm	内装タイル(75×75) (ラス下地)		
				(大)特殊化粧合板 (プリント系)		
		外壁		(大)サイディング(中)		
				(大)サイディング(並)		

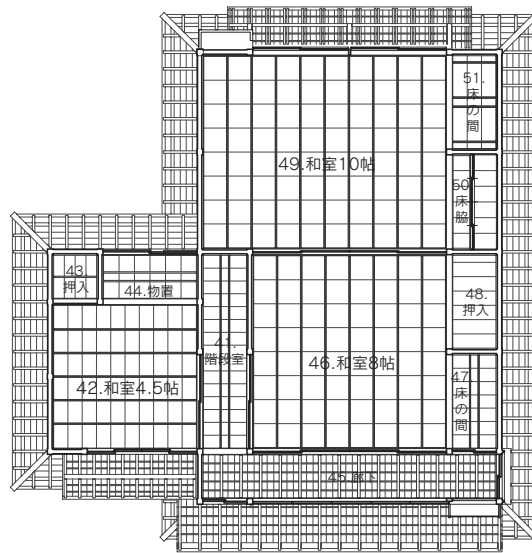
2 13 18  
1 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 14 15 16 17 19 20



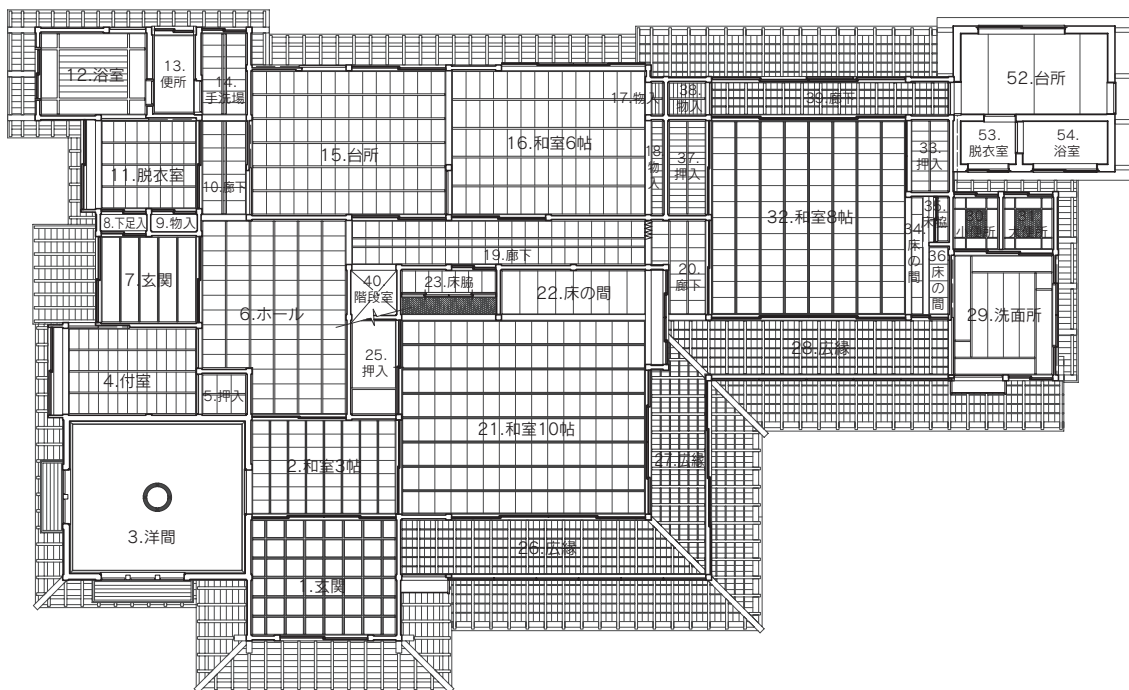
3・44 移築前2階床伏図 1:150



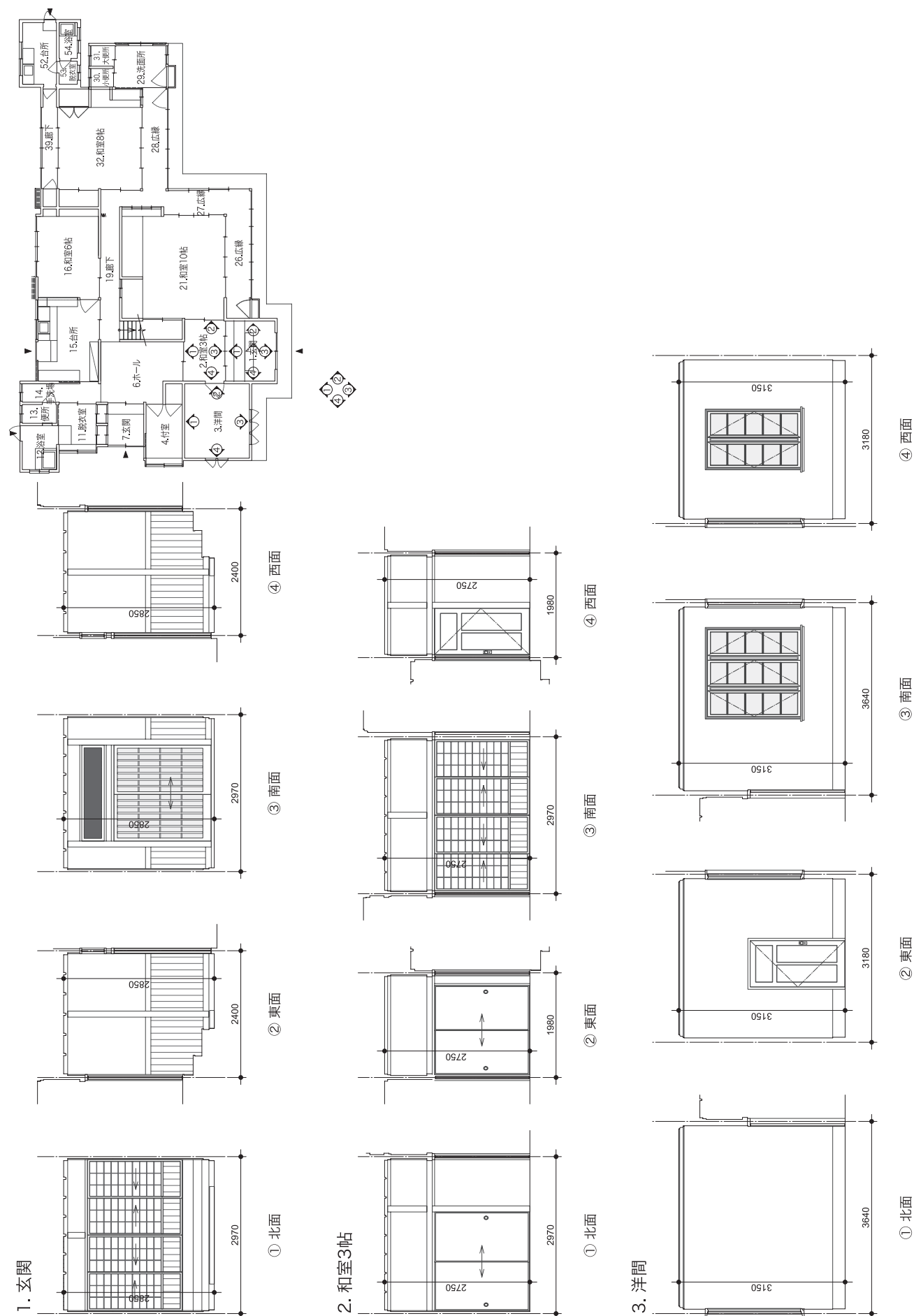
3・45 移築前小屋伏図 1:150



3・46 移築前2階天井伏図 1:150

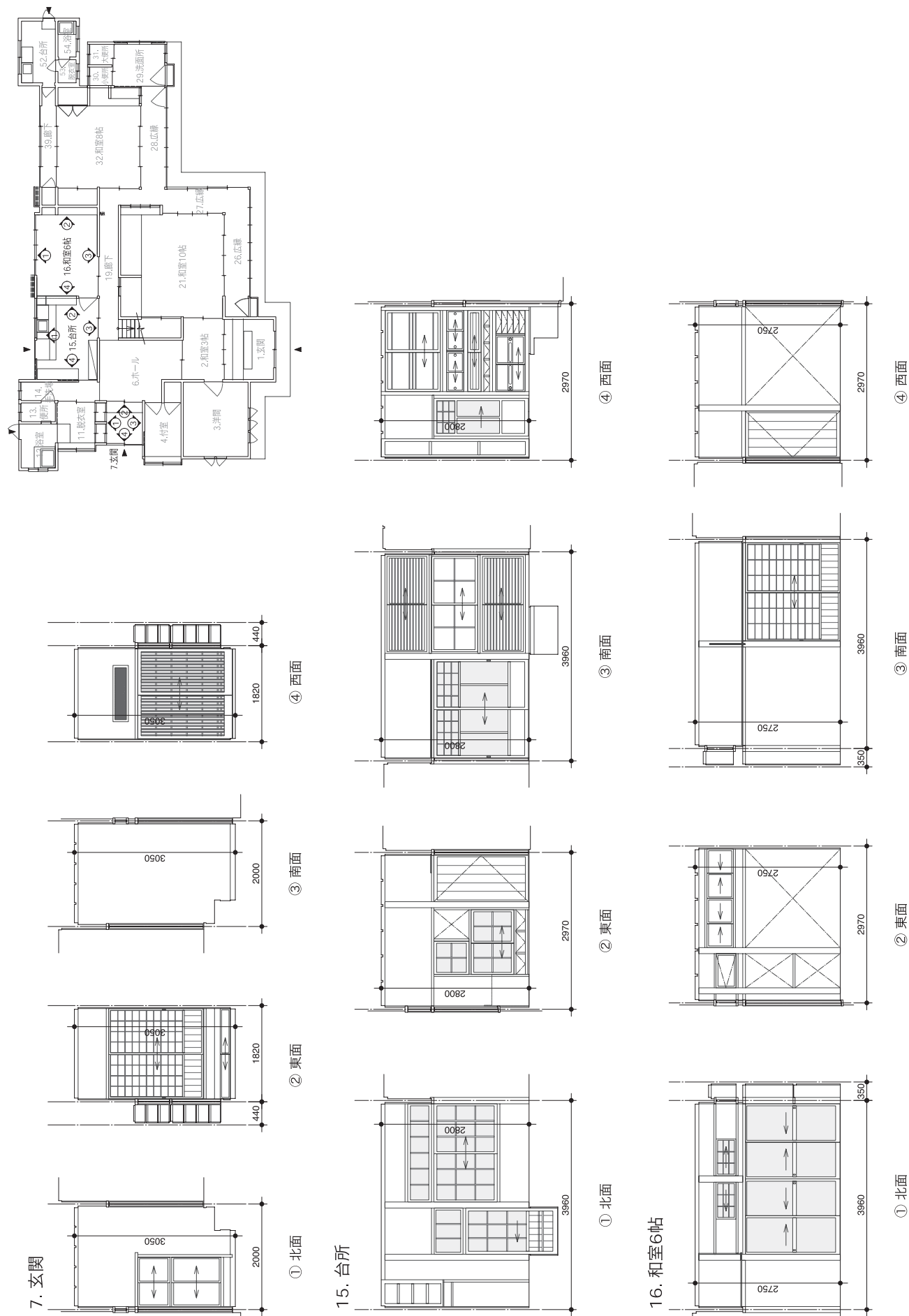


3・47 移築前1階天井伏図 1:150



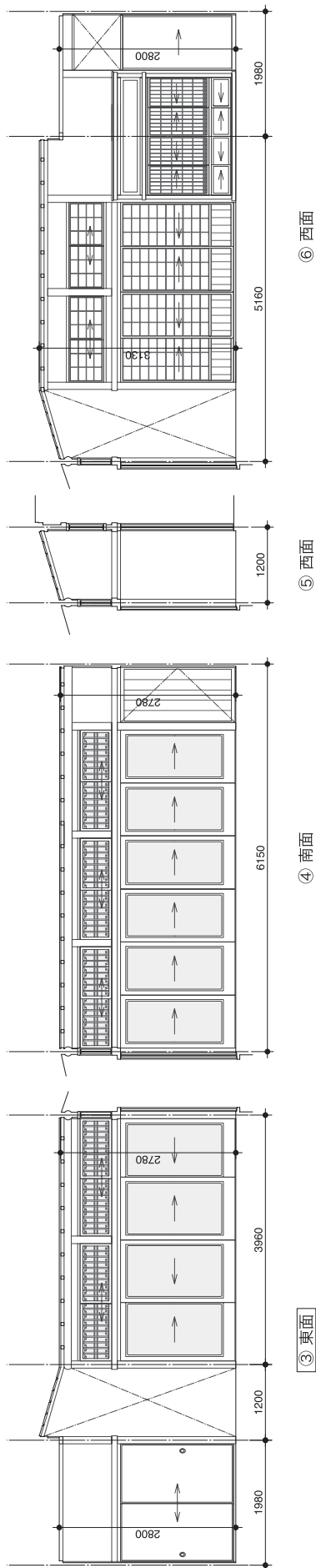
3・48 移築前展開図1 1:100



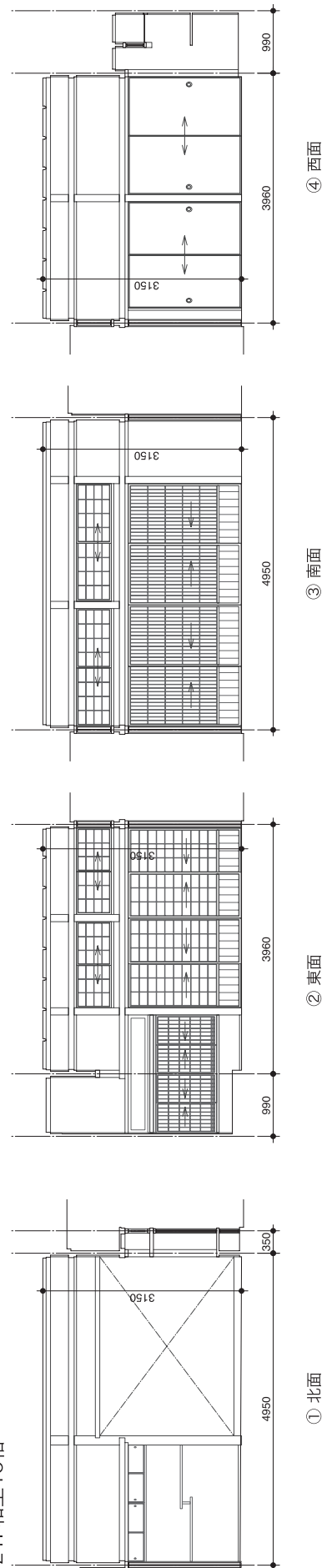


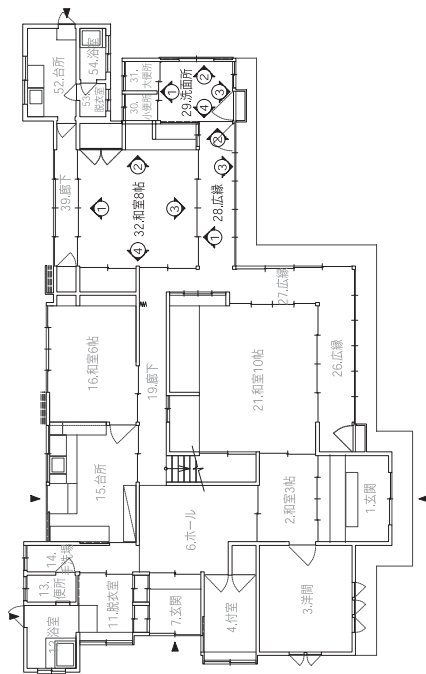
3・49 移築前展開図2 1:100

26, 27. 広縁

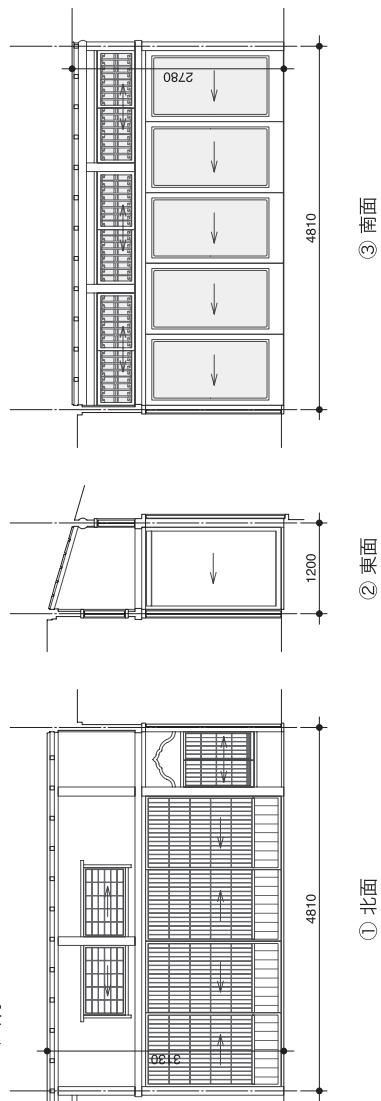


21. 和室10帖

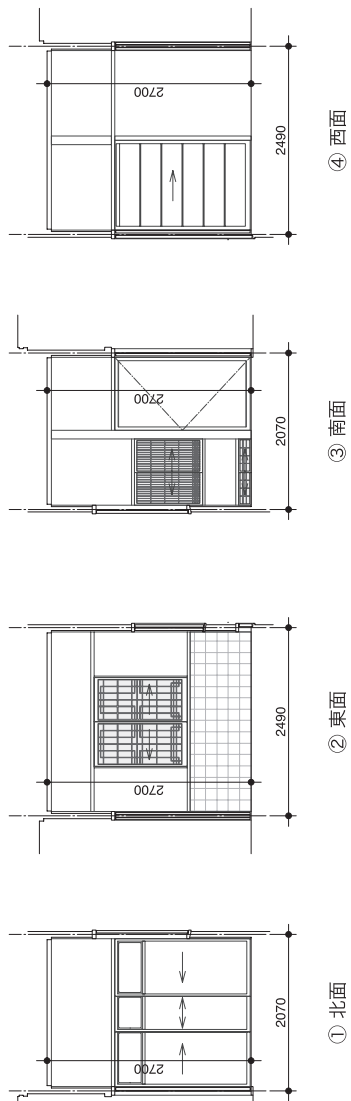




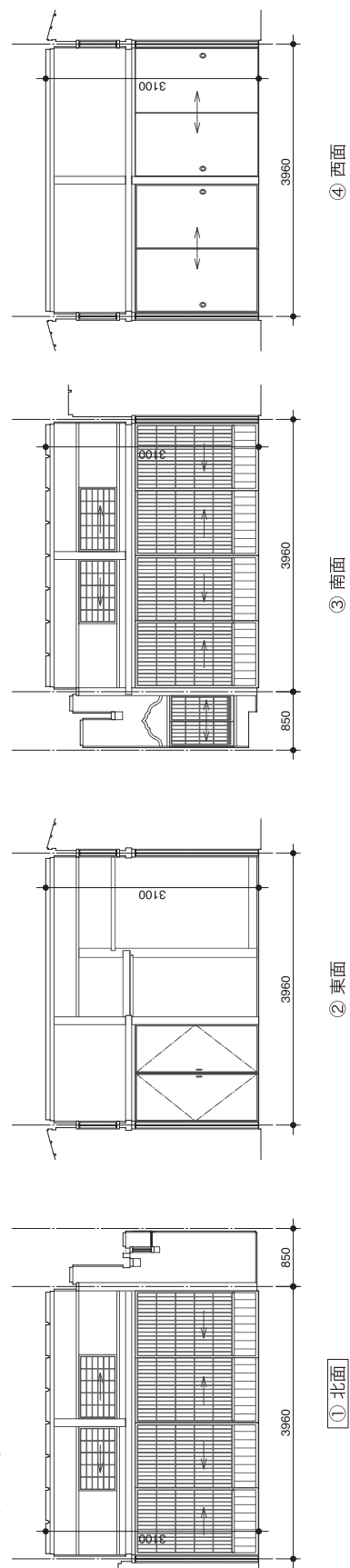
28. 広縁

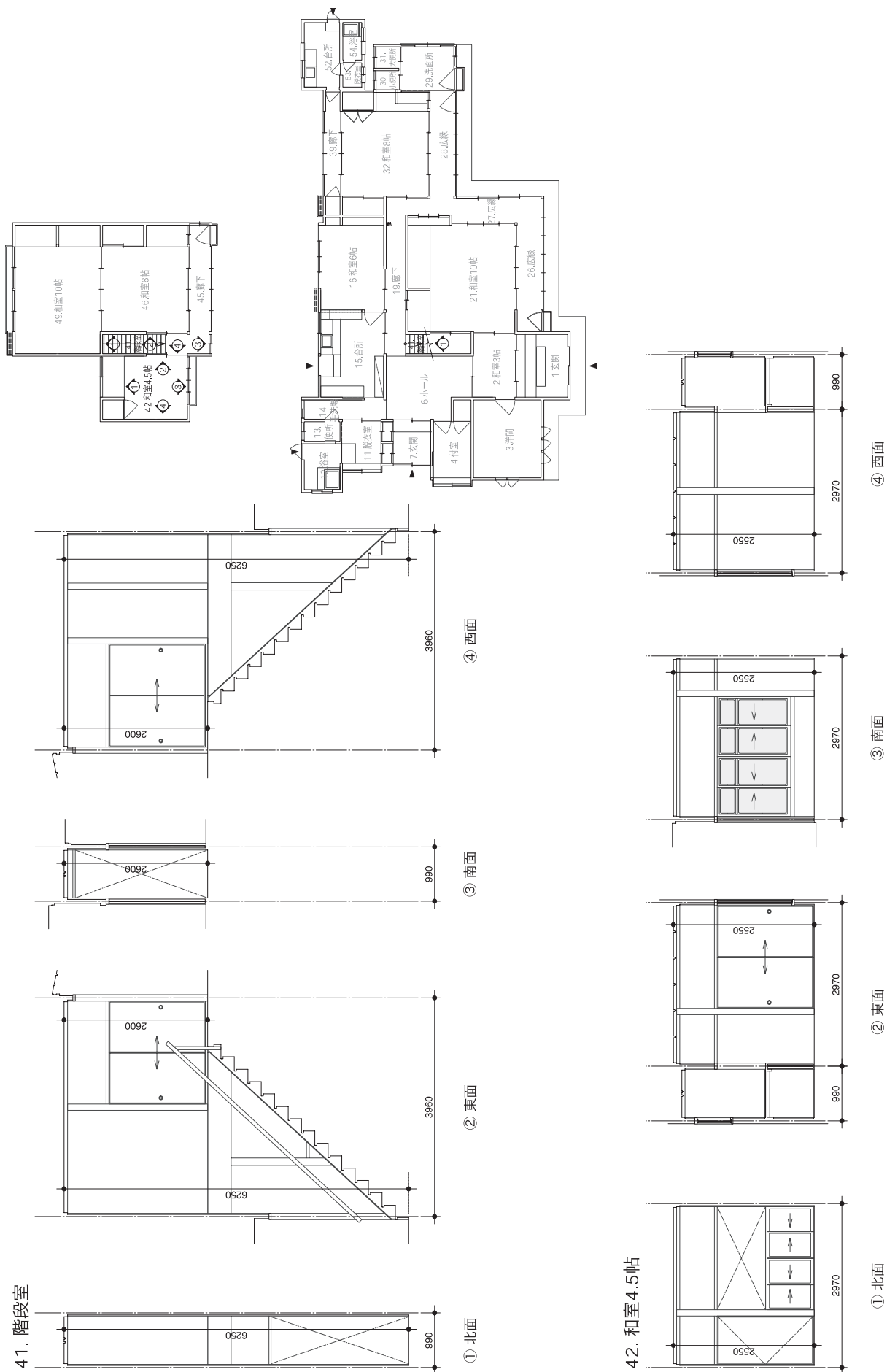


29. 洗面所



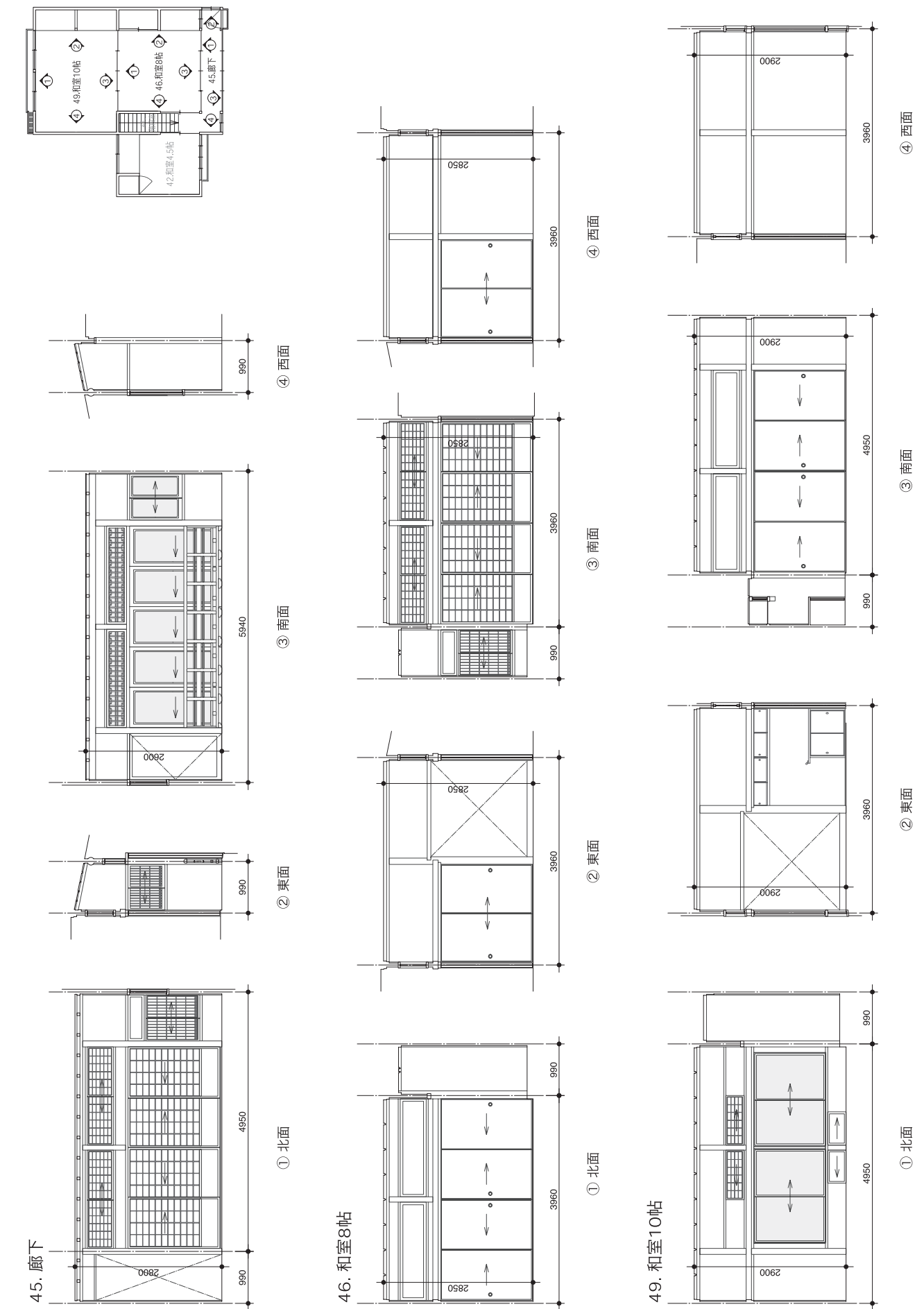
32. 和室8帖





3・52 移築前展開図5 1:100





## 4 解体工事

### 図版解説

- 4・1 2003年4月解体工事着工。解体足場組み立てと防塵シート張り。
- 4・2 北西方向西鉄太宰府駅側のビル屋上から解体現場周辺を俯瞰する。左奥に九州国立博物館の建設現場が見える。
- 4・3 防塵シートを透かして、壁と屋根瓦が下ろされた軸組を見る。
- 4・4 軸組解体を直前にして記念撮影する大庭建設工事担当者。解き工事担当者が引き続き移築再生工事担当となる。
- 4・5 家屋中央部の柱梁と階段。中廊下の造りが分かる。階段は側桁で段板を支えて背板を張る側板階段。
- 4・6 解体前に養生された柱と階段。階高が高く、階段が急勾配になっている。軸組解体作業中の倒壊防止のために仮筋交いや火打ち金物で補強する。
- 4・7 内部間仕切り壁と化粧天井を撤去。外周の壁はまだ残る。
- 4・8 屋根瓦を下ろして下地土を撤去。伝統的な瓦の葺き方であるが、屋根の重量が増し耐震性にも劣るので、現在は一般的な工法ではない。
- 4・9 外壁のささら子下見を撤去。横張りされた下見スギ板とささら子は風食が進み経年の味わいを醸し出している。外壁下地は竹小舞荒壁。丁寧な釘抜きが必要。
- 4・10 廂の化粧野地板を撤去。1本1本の釘を抜く。
- 4・11 2階座敷き床の間ケヤキ一枚板を1階から見上げる。3本の雇いホゾで板反りを防いでいる。
- 4・12 伝統的な真壁の竹小舞下地。腐朽はほとんど見られなかったが、再利用には適さない。
- 4・13 小屋組を解き、上部から順次に軸組を解いていく。
- 4・14 1階奥座敷き小屋組の2本のはね木を見上げる。はね木はテコの原理を利用して、長く突き出ている軒先を支えるために軒裏から小屋組内に取り付けられる材である。
- 4・15 2階座敷き小屋組、軸組を見る。
- 4・16 2階部分の屋根と壁が解かれている。東南の座敷き庭から見る。写真右端に奥座敷き付きの洗面・廁が見える。
- 4・17 松丸太の小屋梁を下ろす。
- 4・18 解いた木材を番付して整理し、一時保存する。
- 4・19 基礎石と庭の景観木を遺して撤去された家屋跡地。
- 4・20 角地のシンボルツリーのように蘇鉄が遺る。
- 4・21 撤去前の御影の基礎石と束石。



4・1



4・2\*



4・3\*



4・4\*



4・5\*



4・6\*





4・7\*



4・8



4・9



4・10



4・11



4・12



4・13





4・14



4・15



4・16\*



4・17



4・18



4・19



4・20

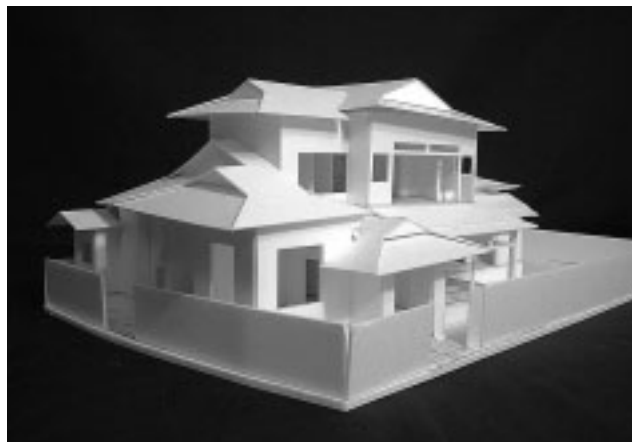


4・21

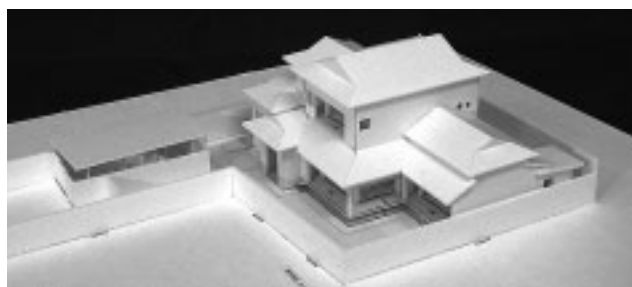
## 5 設計

### 図版解説

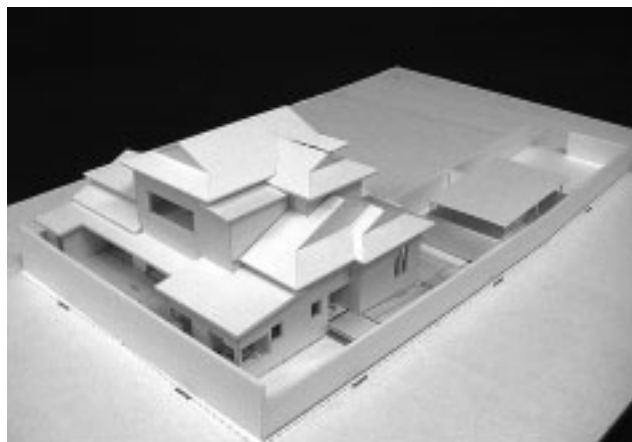
- 5・1 移築前に100分の1縮尺の模型を作り、計画の全体を構想する。
- 5・2 移築先の旗竿敷地に合せて建物の配置計画を練るための100分の1縮尺の模型を作る。東南から俯瞰する。奥座敷付きの洗面・廁部分が切り離され、竿地にガレージと倉庫棟を計画している。
- 5・3 模型を北西から俯瞰する。勝手口玄関の使い方は移築前と変えてバリアフリーのデザインを検討。
- 5・4 PSパネル（省エネタイプの輻射冷暖房設備）と間仕切り収納の意匠検討模型。
- 5・5 軸組模型50分の1縮尺。製作：山本剛司
- 5・6 室内計画模型50分の1縮尺。
- 5・7 軸組模型50分の1縮尺を俯瞰する。
- 5・8 素材と色彩サンプルの模型。
- 5・9 周辺図 1：1000
- 5・10 配置図 1：200
- 5・11 2階平面図 1：150
- 5・12 1階平面図 1：150
- 5・13 南立面図 1：150
- 5・14 北立面図 1：150
- 5・15 東立面図 1：150
- 5・16 西立面図 1：150
- 5・17 植栽計画図 1：250
- 5・18 南北矩計図 1：75
- 5・19 東西矩計図 1：75



5・1



5・2



5・3



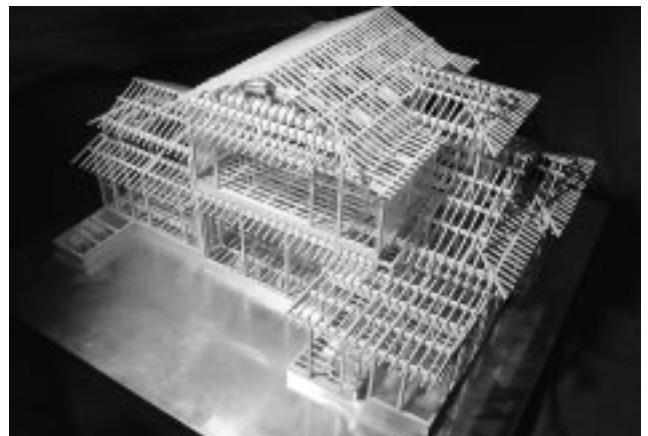
5S・4



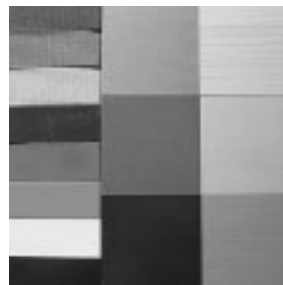
5 · 5



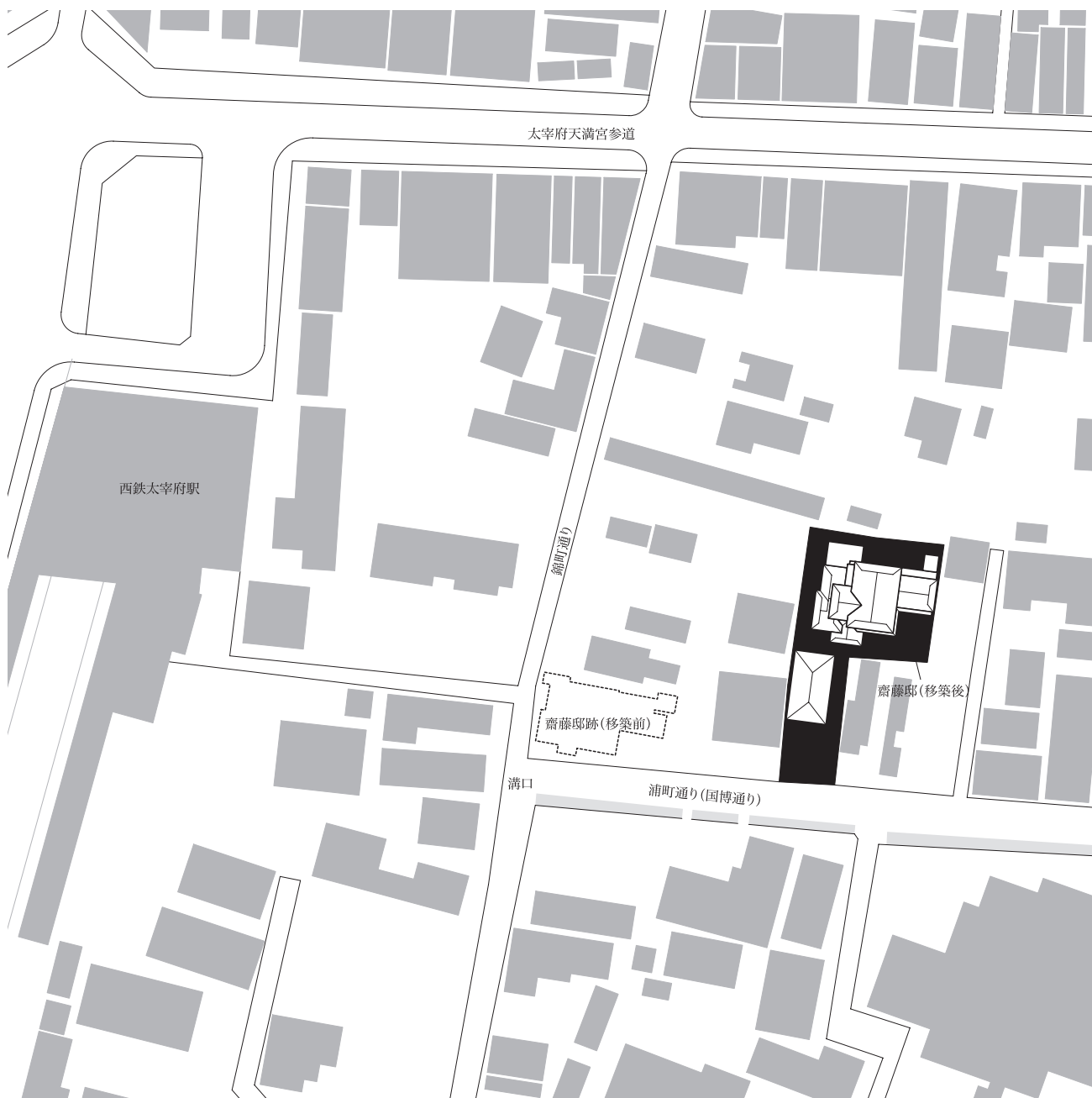
5 · 6



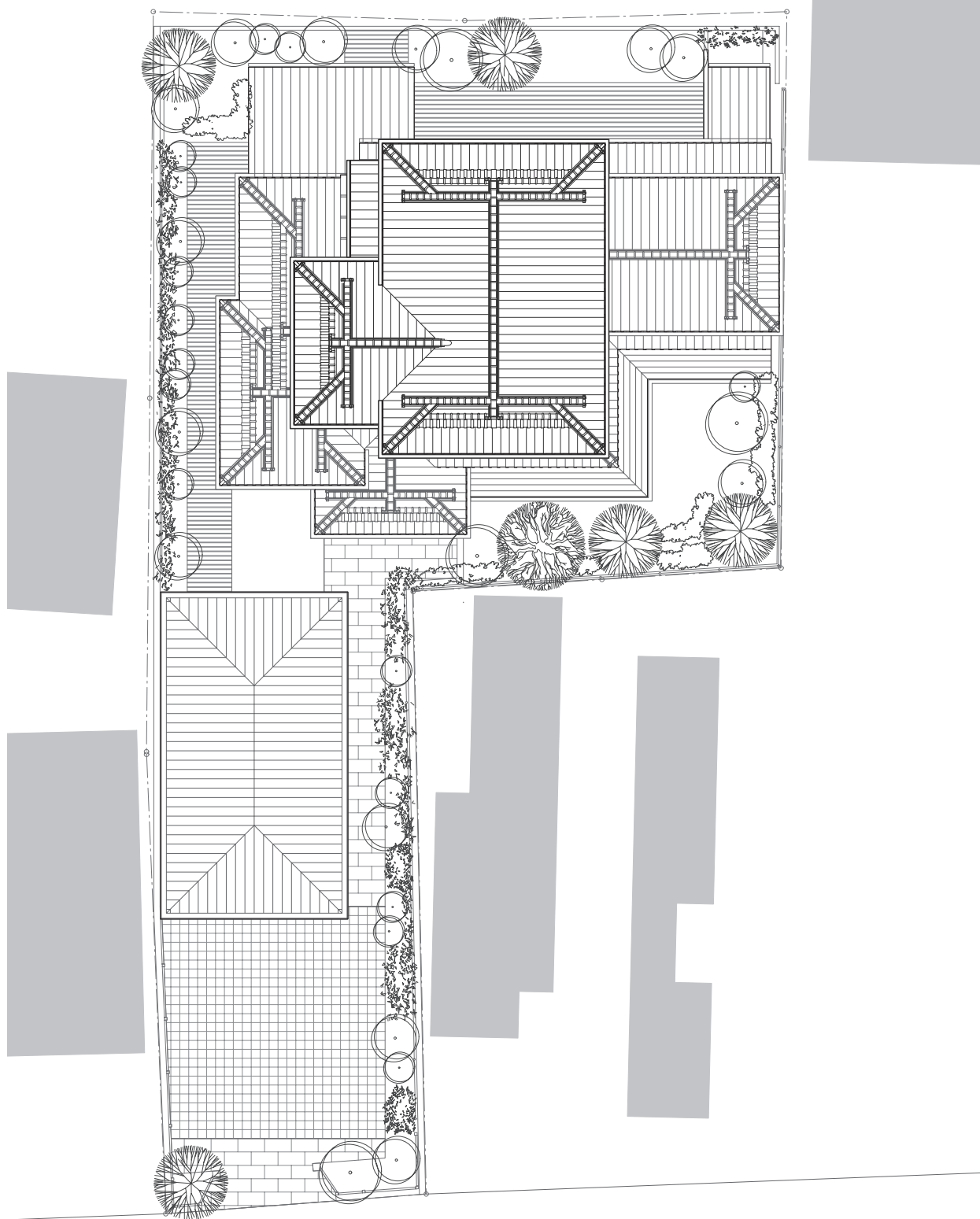
5 · 7



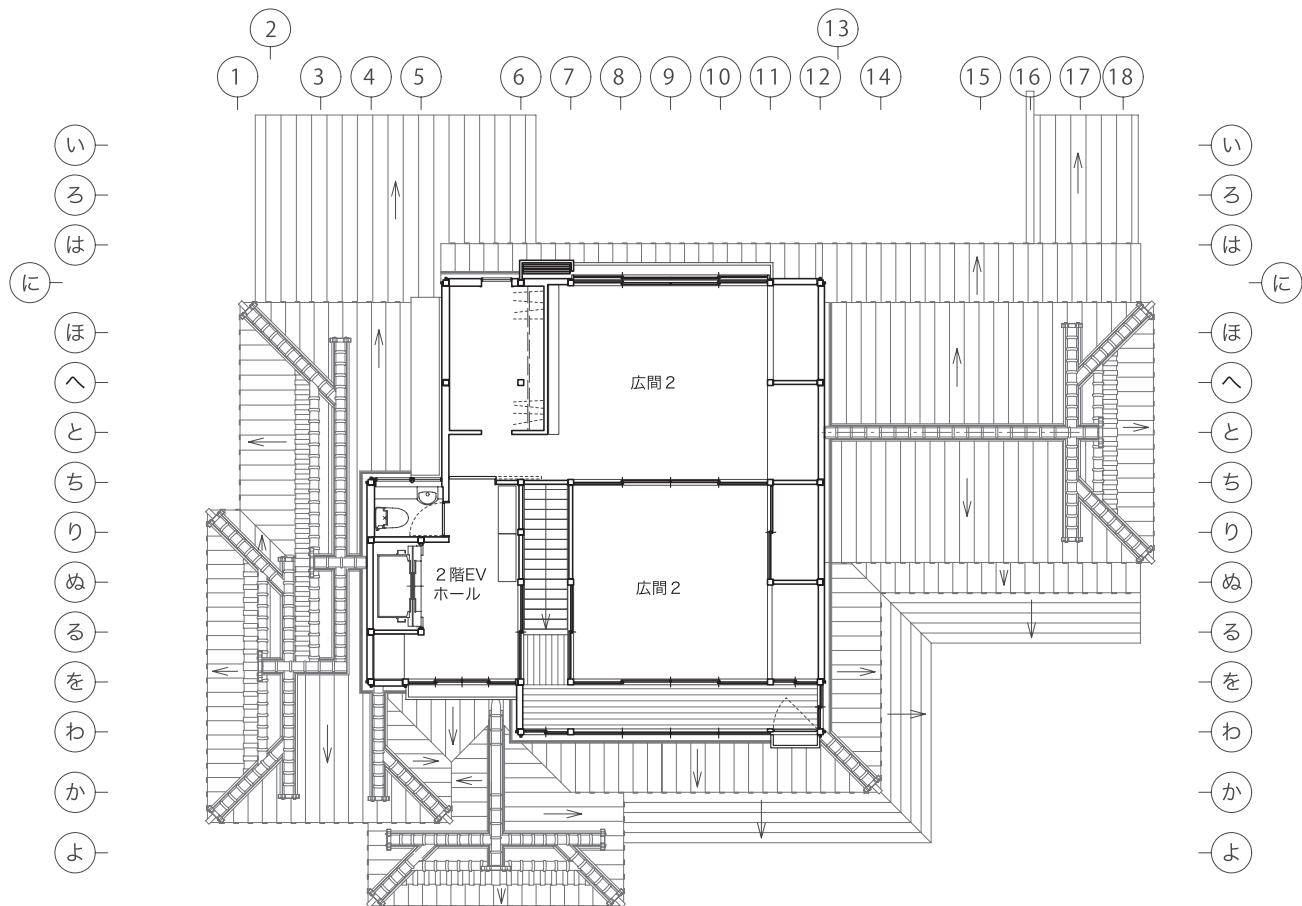
5 · 8



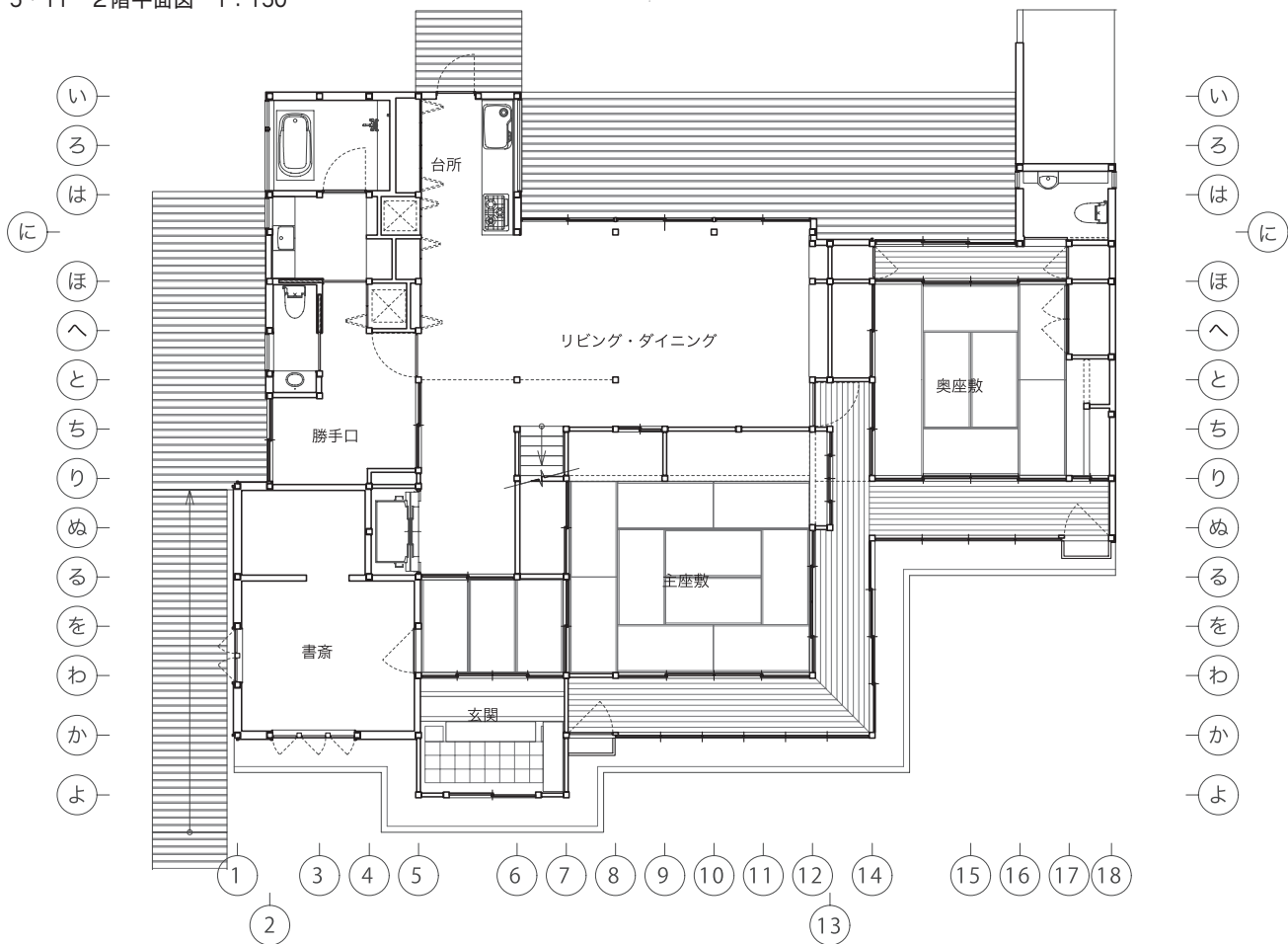




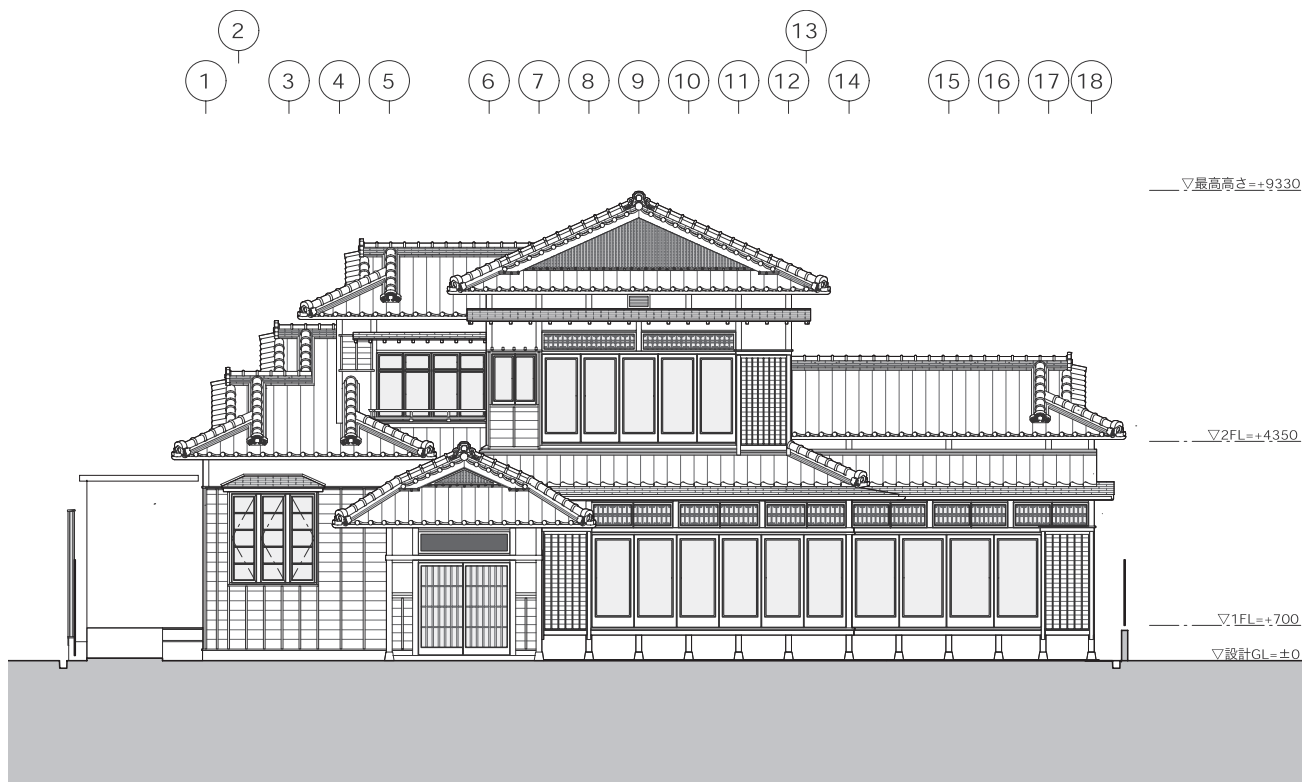
5・10 配置図 1:200



5・11 2階平面図 1:150



5・12 1階平面図 1:150



5・13 南立面図 1：150



5・14 北立面図 1：150

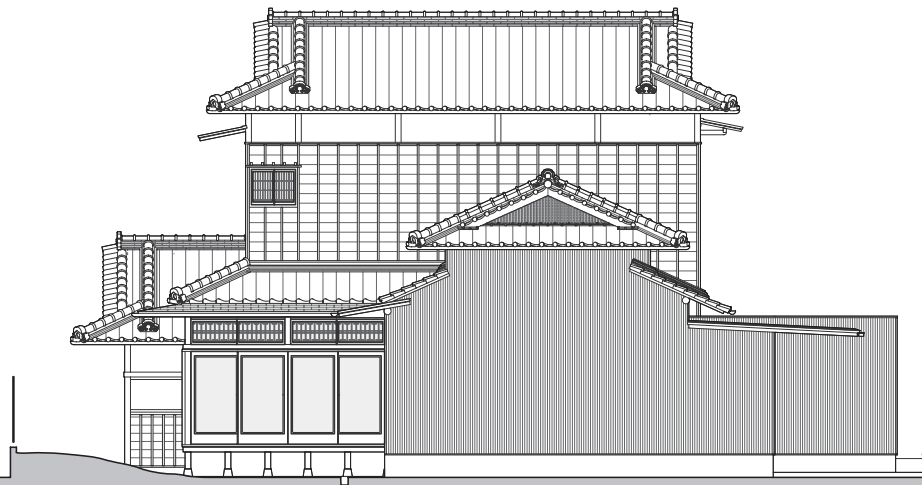
よ か わ を る ん り ち と へ ほ に は る い

最高高さ=+9330▽

2FL=+4350▽

1FL=+700▽

設計GL=±0▽



5・15 東立面図 1:150

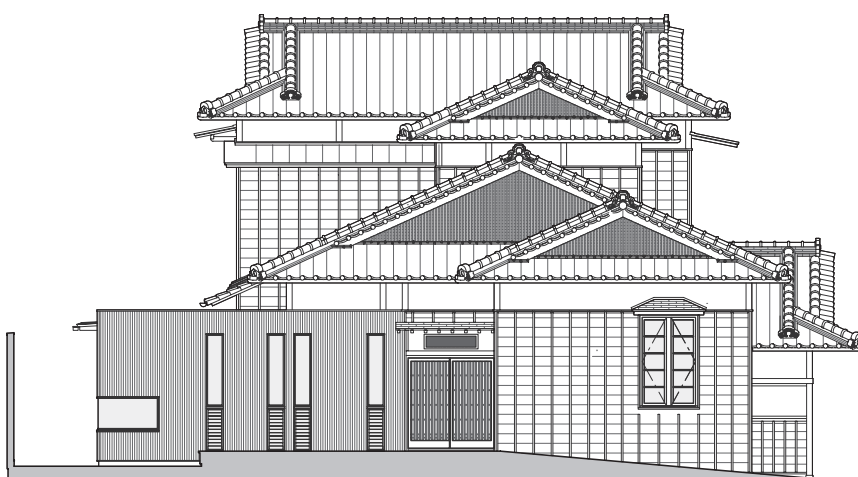
い る は に ほ へ と ち り ん る を わ か よ

▽最高高さ=+9330

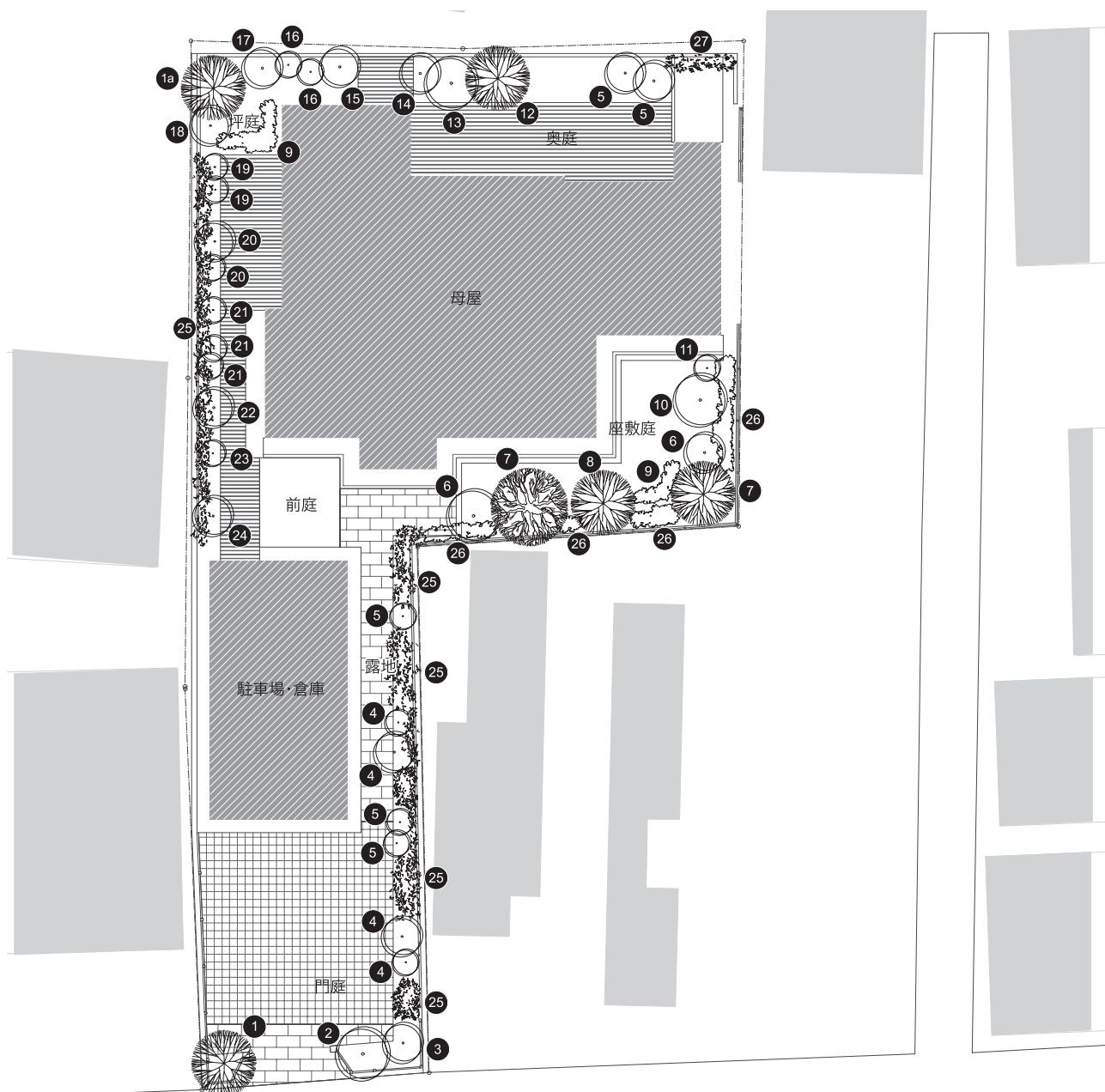
▽2FL=+4350

▽1FL=+700

▽設計GL=±0



5・16 西立面図 1:150

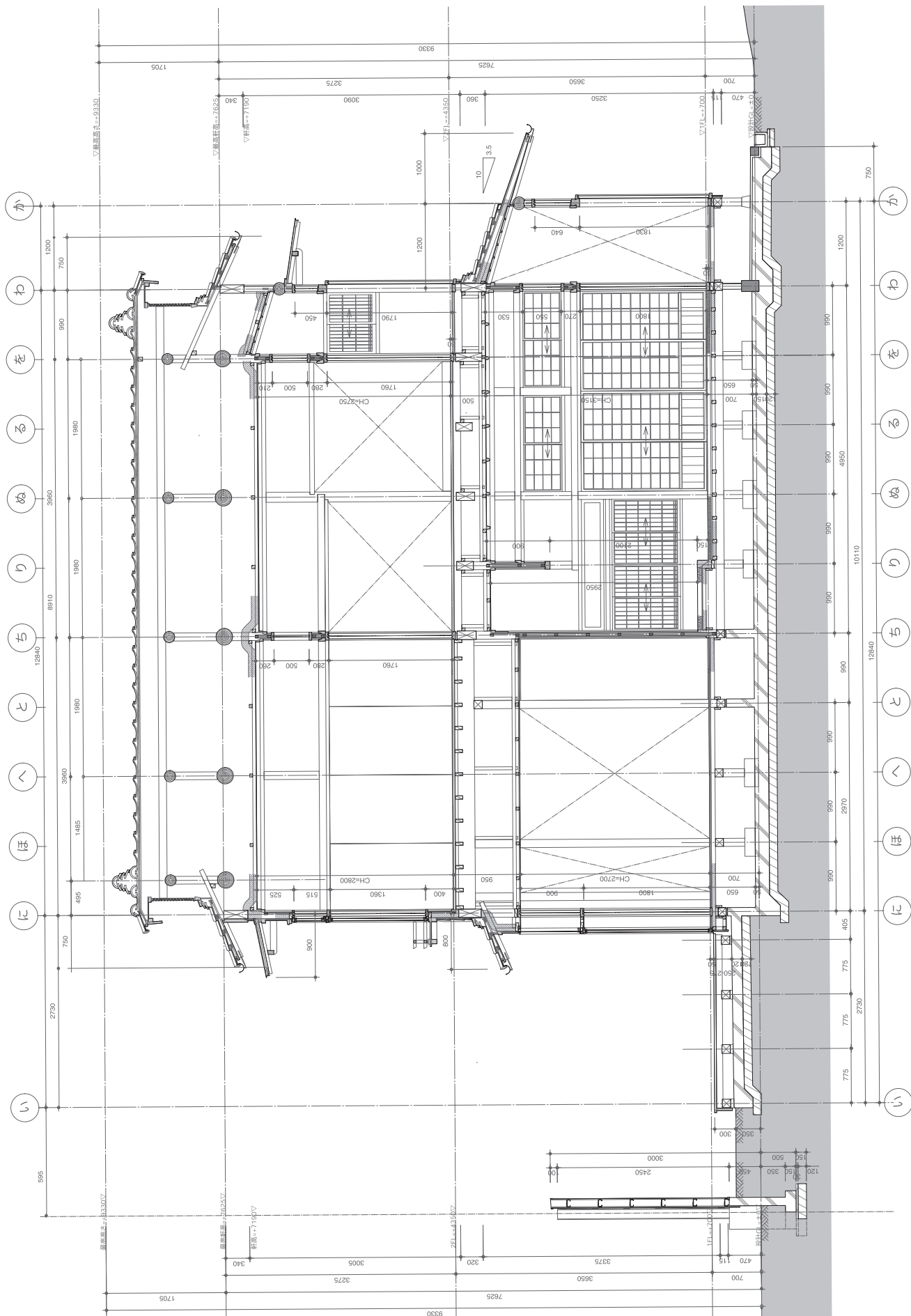


番号	樹木名	数量
①	ウメ	1
①a	ハナミズキ	1
②	モチノキ(既存樹木移植)	1
③	ヤマツバキ(既存樹木移植)	1
④	ヤマモミジ	4
⑤	ヒメシャラ	5
⑥	カンツバキ	2
⑦	イヌマキ(既存樹木移植)	2
⑧	クロガネモチ(既存樹木移植)	1
⑨	ツツジ	適宜

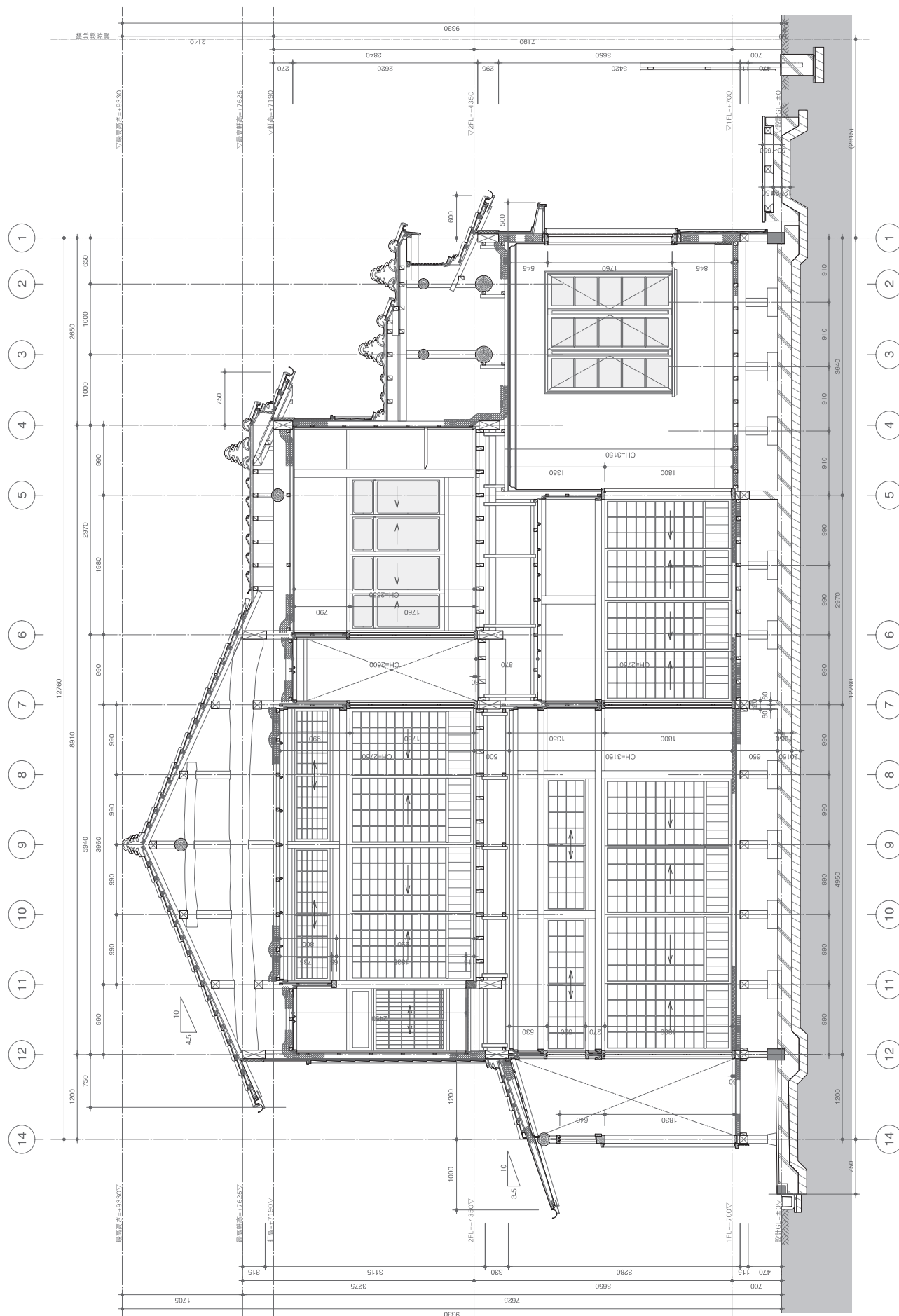
⑩	イロハモミジ	1
⑪	ナンテン	1
⑫	モクレン(シモクレン)	1
⑬	ヤマボウシ	1
⑭	レモン	1
⑮	ザクロ	1
⑯	コブシ(ヤマモクレン)	2
⑰	サザンカ	1
⑱	サルスベリ	1
⑲	キンモクセイ	2
⑳	クチナシ	2

㉑	ニシキギ	3
㉒	ヤマブキ	1
㉓	ロウバイ	1
㉔	ソテツ(既存樹木移植)	1
㉕	生垣/ベニカナムエチ	適宜
㉖	生垣/棒カシ	適宜
㉗	生垣/モウソウチク	適宜
下草1	フッキソウ, タマリユウ	適宜
下草2	トクサ, ササ, シダ等	適宜





5・18 南北矩計図 1:75



5・19 東西矩計図 1:75

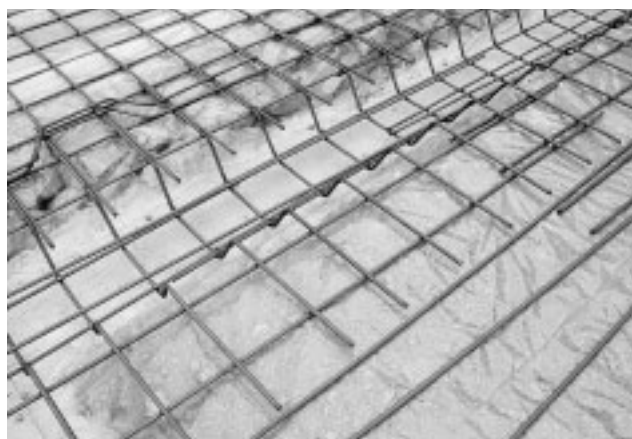
## 6 移築工事

### 図版解説

- 6・1 移築先の旗竿敷地を見る。
- 6・2 基礎土間コンクリート配筋。
- 6・3 基礎。座敷周りの基礎と束石には御影石布基礎を移設。それ以外は構造補強のため鉄筋コンクリートの布基礎を新設している。
- 6・4 土台の据え付け後、柱、梁を搬入して建方を準備する。
- 6・5 柱、梁の建方が始まる。
- 6・6 構造補強に火打ち材を取り付ける。
- 6・7 加工所で木材の補修を行う。
- 6・8 建て方中の2階から、工事中国立博物館方面を見る。
- 6・9 軸組建方。補修された材や代替の新材が混合されている。
- 6・10 組み上がった軸組に屋根垂木が架けられる。
- 6・11 1階奥座敷小屋組を見上げる。2本のはね木を組み込む。ここでははね木の仕様は伝統的な木造工法とは異なるが、建築史料のひとつとして元通りに再現している。
- 6・12 構造補強のため、伝統的な竹小舞に替えて構造用合板を用いている。
- 6・13 内部真壁の伝統的な竹小舞に替えて、ステンレス製の構造ブレースを取り付けている。
- 6・14 ステンレス製構造ブレース詳細。
- 6・15 2階建て部分の柱と床組。
- 6・16 瓦葺き屋根と廂の銅板葺きがほぼ同時に仕上げられる。



6・1



6・2



6・3



6・4



6・5



6・6



6・7



6・8



6・9



6・10





6・11



6・12



6・13



6・14





6・15



6・16

## 7 移築再生

### 図版解説

- 7・1 竿地を利用した玄関導入露地。
- 7・2 玄関と洋間（書斎）。伝統的な和風住宅の玄関脇に応接間を付けた和洋折衷住宅の形式を構成している。洋間の窓先には庭木として珍しい観賞用ソテツを移植して、根周りに解体された古瓦を敷いている。玄関部の屋根瓦の全てと、各屋根の鬼瓦は元の瓦を再利用している。
- 7・3 移築修景された正面全景。
- 7・4 東南から庭越しに見る。
- 7・5 西側から見る。勝手口前には雨除けと目隠し壁を張ったポーチを新設している。
- 7・6 勝手口へのバリアフリー斜路を新設。奥に坪庭を設ける。
- 7・7 玄関の庭景として据えた手水石と灯籠。
- 7・8 奥庭（北側庭とテラス）。敷地境界に高めの塀を設けて天空の反射光を得ている。下草のクマササの中にハナミズキとコブシを植栽。
- 7・9 門庭。門柱と板塀は移築修景したもの。板塀の支え石は新設。太宰府のイメージツリーとしてウメ古木を植栽。
- 7・10 竿地に新設されたガレージ内観。壁面と天井間に空隙を設けて、道路と母屋間の視覚的な見通しを計っている。
- 7・11 玄関脇書斎。応接間としての利用から書斎に転用している。勝手口横の付室は書庫に改造して書斎と繋いでいる。床はチーク材の寄せ木張りに改装。プラスター塗りの天井中央を飾る照明グローブは、大正、昭和初期の洋風化が取り込まれた時代を感じさせるアールデコ調の西欧様式器具を取り付けている。カーテンはこの時代より少し遡るイギリスの室内装飾品をデザインしたウィリアム・モリスのテキスタイルデザイン生地を用いて新調している。机は齋藤家代代のものを修復塗装している。
- 7・12 ホール。正面に白色のPSパネル（輻射冷暖房設備）を設置。室内の温熱環境調整と目隠しスクリーンの役割を果たす。左手に住宅用エレベータを新設し、バリアフリー化を計る。エレベータ廻りの表装色彩は、連続して並ぶ収納間仕切扉のボンベイアンレッドと同色塗装。
- 7・13 玄関の間から玄関格子戸を見る。伝統的住居の玄関様式を構成している。
- 7・14 玄関の間から主座敷を見る。
- 7・15 主座敷の東と南に廻る縁側から座敷庭を見る。天井コード照明は、アールデコ調デザインのグローブを新設している。本来はカーテンなどの取り付けはなかったが、ここでは縦型ブラインドを新設している。
- 7・16 修理・修復された主座敷。柱、長押、天井は台湾ヒノキ材で造作されている。聚楽塗り壁色は元の黒色から薄ネズに替えている。
- 7・17 主座敷から縁側を通して座敷庭を見る。
- 7・18 移築前の台所と食事室を改造したリビング・ダイニング
- 7・19 食事室と台所を見る。
- 7・20 2階広間を見る。
- 7・21 階段側から2階広間の縁側を見る。
- 7・22 勝手口を見る。土間の段差はバリアフリー化を計るために、外部ポーチ床と室内床を平坦に連続するように改造している。格子戸や欄間は修復再利用。
- 7・23 トイレ、洗面、浴室と併置してバリアフリー化を計っている。
- 7・24 中廊下に外光を導くために新規にデザインしたステンドグラス。緑と風をモチーフにした。デザイン：工藤啓子
- 7・25 奥座敷の縦繋障子前に白色の縦繋PSパネルを並べる。
- 7・26 倉庫（蔵）入り口からガレージ出入口を見る。壁と天井間には空隙を設けて視線を透している。



7・1



7・2\*



7・3



7・4



7・5





7・6



7・7\*



7・8



7・9



7・10





7・11\*



7・12



7・13



7・14



7・15



7・16\*



7・17



7 · 18



7 · 19



7・20



7・21

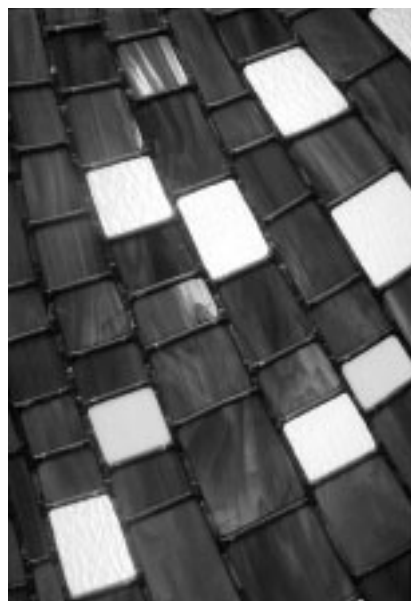




7 · 22



7 · 23



7 · 24



7 · 25



7 · 26